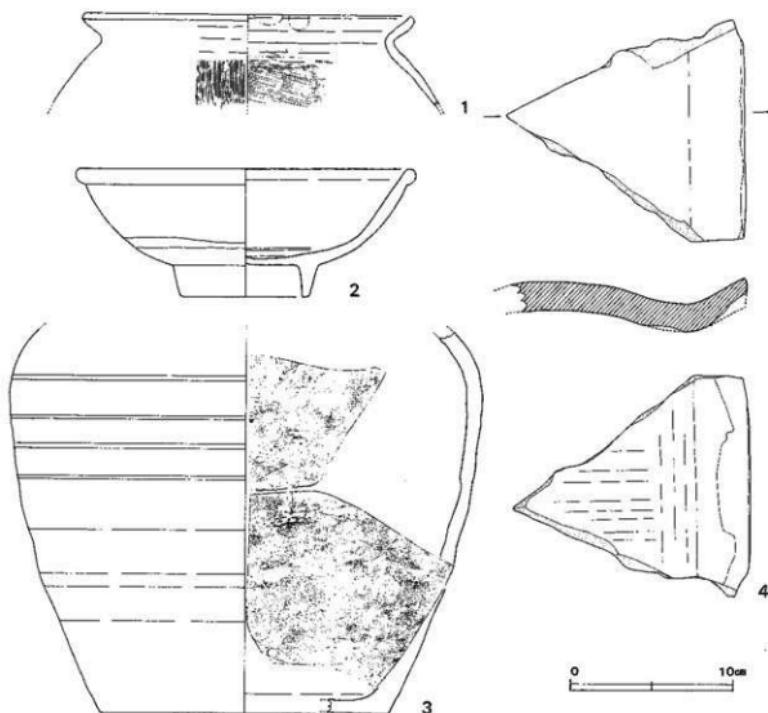


P0611は標高8.80mの調査面で、他のピットに切られた状態で確認した。N-77°-E方向に長く、検出規模は長さ87cm、幅60cm程度である。遺構東寄りで最も落ち込み、この箇所の深さは23cmを測る。平坦な坑底からの側壁の立ち上がりは、東側では急であるが西では緩やかである。1層のみ観察できる覆土からは、138-2・138-3に示した肥前系の陶器や138-4の平瓦が出土しており、比較的新しい遺構であることがうかがえる。



第138図 主要ピット出土陶磁器等実測図 (1:3)

溝状遺構

SD01（第140・141図）

1Grから2Grにかけて検出したSD01は、調査区内で遺構の東肩が確認できなかったため、幅については不明であるが、西肩はN-77°-E方向に伸びる。調査区壁崩壊のおそれがあり完掘には至っていないが、サブトレンチを設定し掘削を進めた結果、標高7.86mで地山の砂層が確認できたため、ここを底と判断した。この遺構の検出面の標高は9.00mであることから、深さは114cm程度と考えられる。

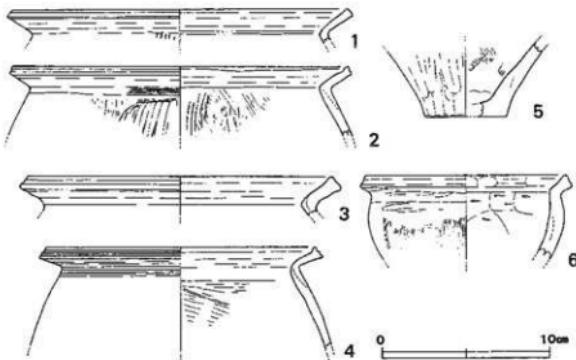
調査区北壁でこの遺構の断面を観察したところ11層に分層できた。この覆土からビニール袋半分程

度の弥生土器、土師器、石製品が出土しており、実測可能なものはほとんど図示している。

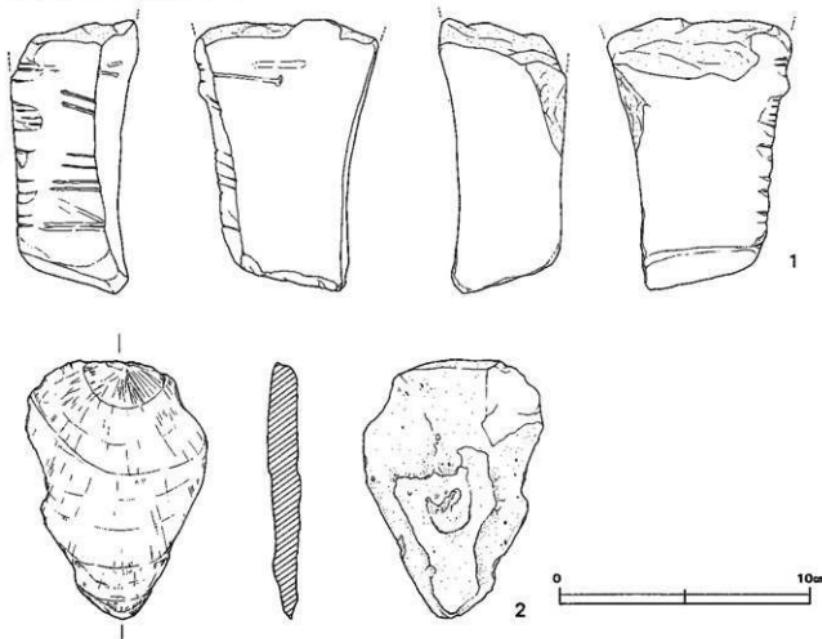
140-1～140-6は弥生土器を示した。中期のものが多いが、140-6のように後期のものも若干みられる。

141-1・141-2には石製品を示している。前者は砂岩製の砥石である。4面に研ぎ面を残し、うち1面には切り込み状の条溝が複数残る。後者は流紋岩で、石核から打ちはがされたのち、何も加工を施されていない石片と考えられる。

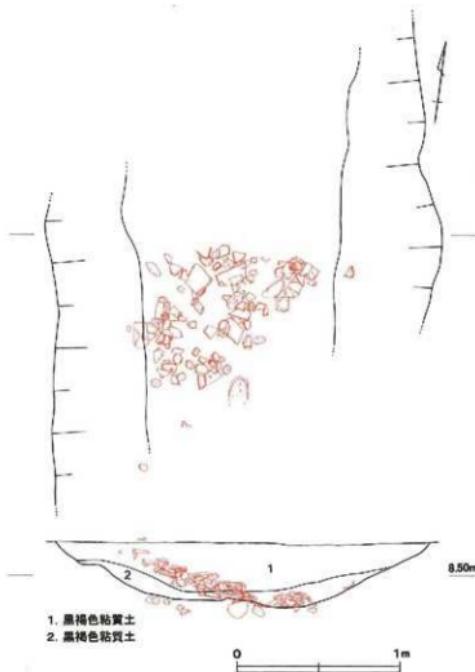
なお、この遺構は西寄りの第8層から第11層では弥生土器片のみが出土するため、この部分は弥生時代の溝である可能性がある。



第140図 SD01出土弥生土器実測図 (1:3)



第141図 SD01出土石製品実測図 (1:2)



第142図 SD02実測図 (1:30)

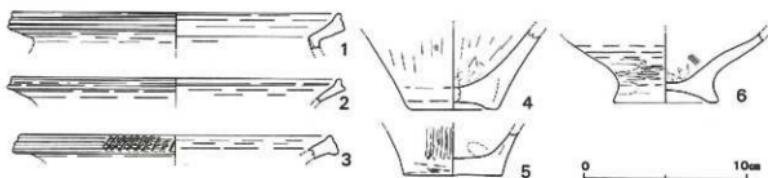
SD02 (第142・143図)

3Grから4Grにかけての標高8.70mの調査面において、N-10°-W方向に軸をとるSD02を検出した。検出規模は幅240cm程度、深さ39cmを測り、断面は皿状を呈している。

覆土は2層に分層可能で、ここからコンテナ1箱分の瓦と、ビニール袋2袋分の陶磁器などが出土しているため、遺構の時期は近世以降である。

SD03 (第144図)

11Grから13Grにかけての標高8.95m前後の調査面においてSD03を検出した。調査区狭隘のためごく一部の調査に終わったが、幅は3.0m程度と推定でき、N-81°-E方向に軸をとると考えられる。標高8.05m付近に平坦な底を有し、側壁の立ち上がりは比較的緩やかであり、断面は台形を呈すると考えられる。調査区北壁の断面を観察すると覆土は6層確認でき、層の切り合い関係から掘り返しが行われたと推察できる。

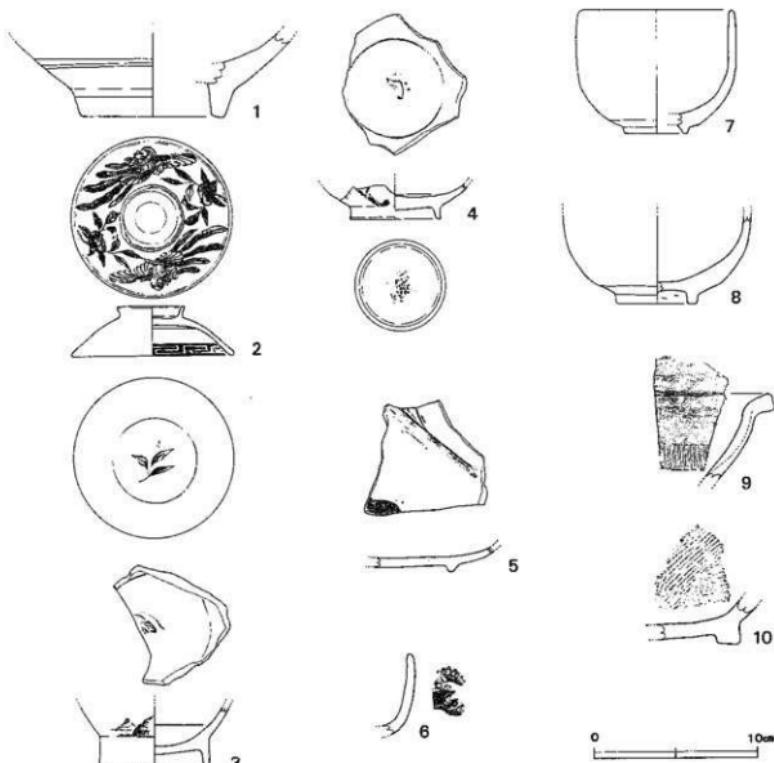


第144図 SD03出土弥生土器実測図 (1:3)

弥生土器片がビニール袋半分弱出土し、このうち図化可能なものはほとんど144-1～144-6に図示した。いずれも中期のものであり遺構の時期を示す資料と考えられる。

SD04 (第145・146図)

15Grから17Grにかけての標高8.90mの調査面においてSD04を検出した。当初は上幅4m程度の大溝と捉えていたが、調査を進めるうちに南側と北側にそれぞれ溝状遺構が存在することが確認できた。



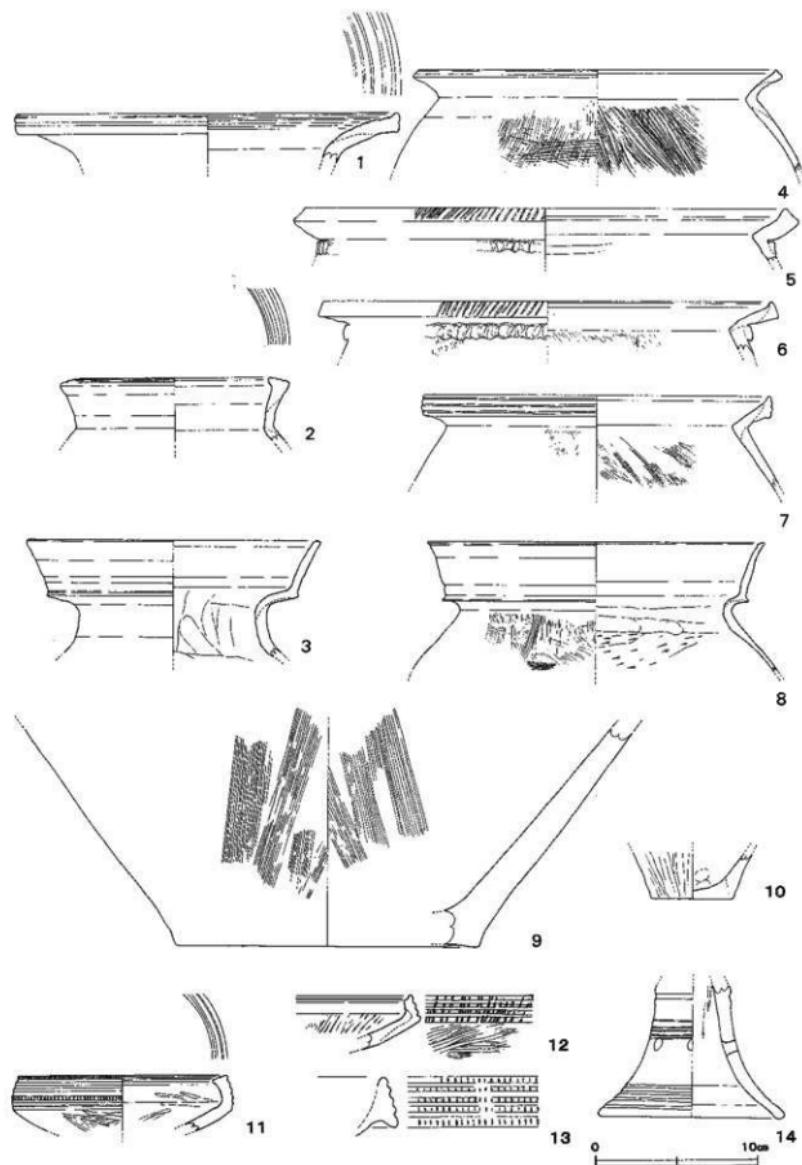
第143図 SD02出土陶磁器実測図 (1:3)

調査区北壁で断面を観察したところ、南側の溝が北側の溝を切っているように見受けられるが判然としないため明言は避けたい。以下個別に報告する。

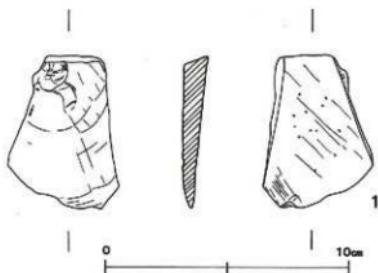
南側の溝状遺構は、N-74°-E方向に軸をとり、調査面での上幅は1.8mと推定される。底の標高は8.00m程度であり、断面は「U」字あるいは「V」字状を呈すると思われる。覆土については調査区北壁が崩壊したため不明である。

北側の溝状遺構はN-81°-E方向に軸をとり調査面での上幅は推定1.9mと推定される。標高8.20m付近に平坦な底を有し、断面は台形を呈するものと考えられる。覆土については4層確認できる。

出土遺物については、南側と北側のものをあわせてコンテナ半分程度の弥生土器の破片が出土している。このうち残存状態の良いものを選別し145-1～145-14に図示した。中期のものが多いが^g、145-3に示す終末期の壺は北側溝状遺構の最下底で出土しており、遺構の時期を示すと考えられる。また、145-7の終末期の壺は南側溝状遺構の中層付近で出土しており、遺構の時期を示す可能性がある。このため、2条の溝条遺構の新旧は判然としない。



第145図 SD04出土弥生土器実測図 (1:3)



第146図 SD04出土石製品実測図（1:2）

なお、146-1に示す石製品も上層から1点出土している。流紋岩製の打製石器で、石核から打ちはがされたのちに何も加工を施されていない石片と思われるが、このまま使用された可能性もある。

SD06（第147・148図）

17Grから18Grにかけての標高8.70mの調査面でSD06を検出したが、調査区北壁の断面を観察すると標高8.90m付近からの落ち込みが確認できる。N-74°-E方向に軸をとり、検出規模は上幅は80cm、深さ30cmを測り、断面は「U」字状を呈している。

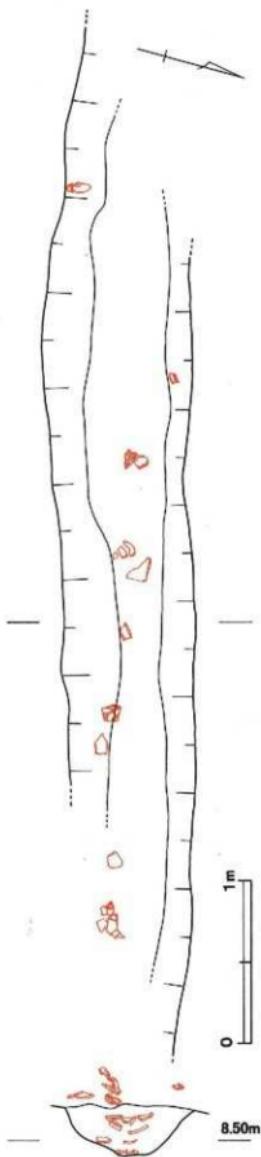
1層のみ確認できる覆土からは、ビニール袋半分程度の弥生土器の比較的大きな破片が出土しており、図化可能なものはほとんどを148-1～148-7に図示した。いずれも中期のものであり遺構の時期を示す可能性がある。

しかし、30cm離れた場所に位置するSD04南側溝状遺構と軸方向が同じで、かつ、覆土も酷似することから、同時に機能していた可能性も指摘できる。この場合、SD06が機能していた時期は弥生時代終末頃と推測できる。

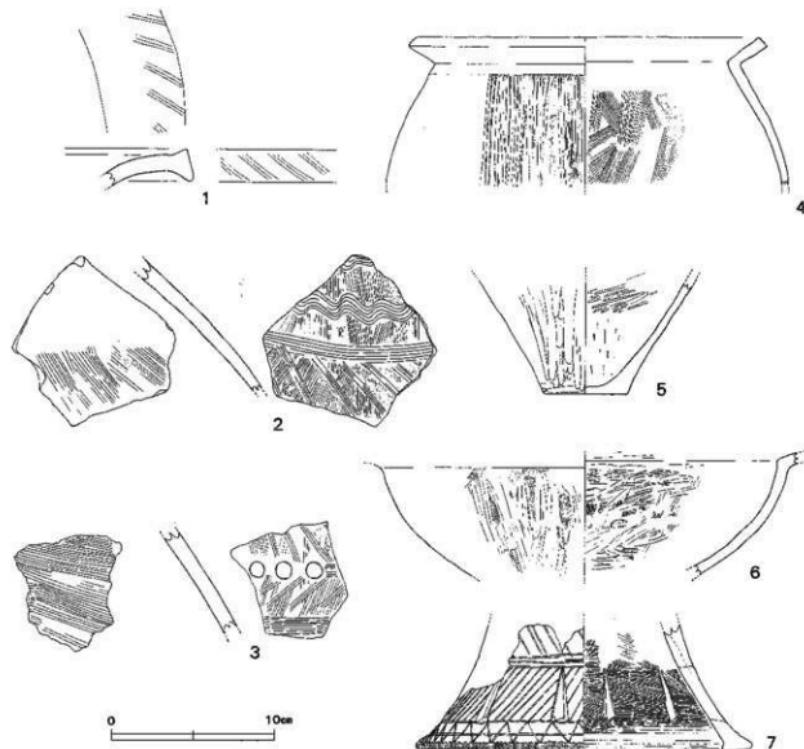
SD07（第149・150図）

18Grから19Grにかけての標高9.05mの調査面でN-67°-W方向に軸をとるSD07を確認した。ごく一部の調査に終わったが、検出規模は上幅200cm、深さ78cmを測る。断面形は底付近で幅が狭まる漏斗状を呈すると考えられる。

2層に分層可能な覆土からはビニール袋半分弱の弥生土器の小片が出土しており、実測可能なものはほとんど図示した。150-1・150-2は広口壺である。口縁部の内面や端面に斜格子文などを



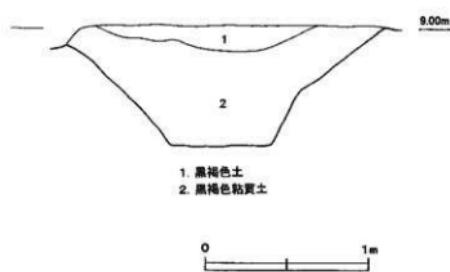
第147図 SD06実測図（1:30）



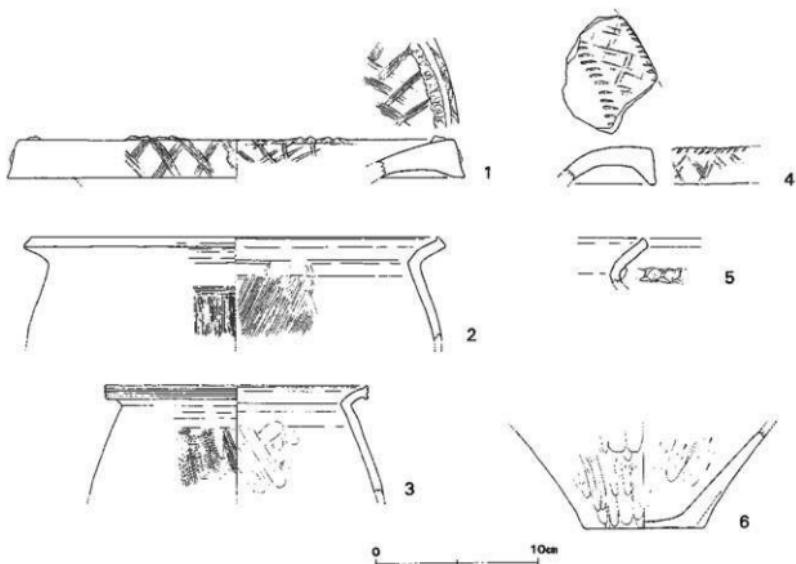
第148図 SD06出土弥生土器実測図 (1:3)

施し装飾性に富んでいる。続いて窓を示している。150-3は口縁端部が上方に若干拡張し、150-4は頸部に突帯文を貼り付けている。また、150-5は口縁部が上下に若干拡張し端面に2条の凹線文が施される。いずれも頸部以下の内面はハケ調整が施されている。

これら出土遺物は中期のものであり、造形の時期を示すと考えられる。



第149図 SD07断面図 (1:30)

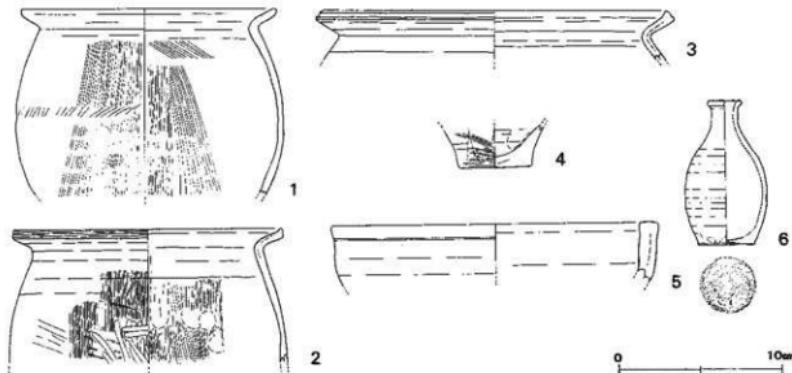


第150図 SD07出土弥生土器実測図 (1:3)

3区造構外の出土遺物

3区の造構外出土遺物は少なくコンテナ半分に満たない。弥生土器の占める割合が高く、その他に鉄製品、古錢が1点ずつ出土している。なお、弥生土器については図示を割愛したものが若干ある。

弥生土器等（第151図）



第151図 3区造構外出土弥生土器等実測図 (1:3)

151-1～151-4では弥生土器を取り上げた。151-1は口縁端部が拡張しないが、151-2・151-3では上方に拡張が認められる。また、151-3は口縁端面に凹線文を巡らせてている。151-4は壺の底部と思われる。平底で径は小さく、内面はナデ調整が施されている。以上、弥生土器は中期中葉から中期後葉のものと考えられる。

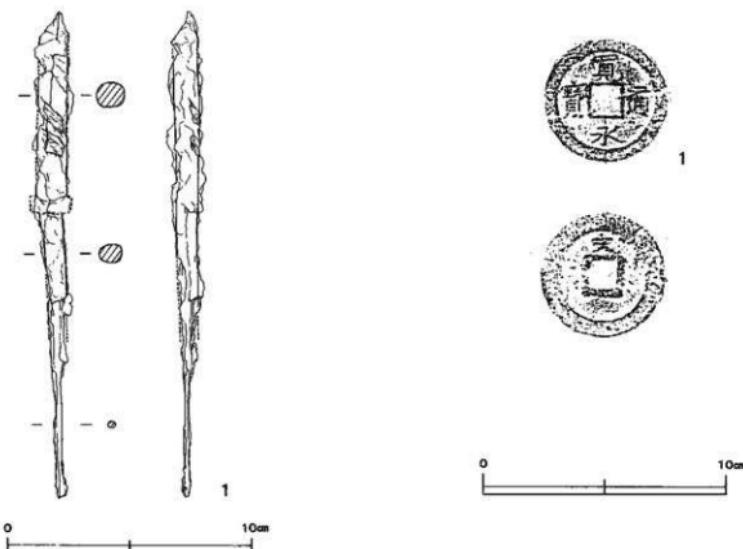
151-5は鉢の口縁部片であろう。胎土は土師質であるが時期は不明である。151-6は小型の壺である。底部外面以外のほぼ全面に釉薬が施されている。底面には回転糸切り痕が認められるが、時期は不明である。

鉄製品（第152図）

鉄製品は3区の遺構外から1点のみ出土しており、152-1に図示した。先端部を欠くが鉄鎌と思われる。断面は鎌身部で角に丸味のある方形、長身の柄部は円形を呈している。また、鎌身部と柄部の境にはのかつぎと思われる突起が認められる。時期については古代から中世以降の比較的新しいものと思われる。

古銭（第153図）

古銭は1点出土しており、153-1に示した。表に「寛永通寶」、裏に「文」の字が認められる。17世紀後半の文銭と考えられる。



第152図 3区遺構外出土鉄製品実測図 (1:2)

第153図 3区遺構外出土古銭拓影 (1:1)

田畠遺跡4区

4. 4区の調査結果

調査区の概要と遺構配置（第154・155図）

4区は3区の西に位置しており、田畠遺跡の中心付近を横切ると考えられる細長い調査区である。南を市道浅柄古志線に、北を畠によって挟まれているため、調査区壁崩壊に備え、調査対象地の境界から50cm程度内側を掘削している。この調査区の規模は長さ92m、幅1m～2.5mを測り、面積は約210m²である。

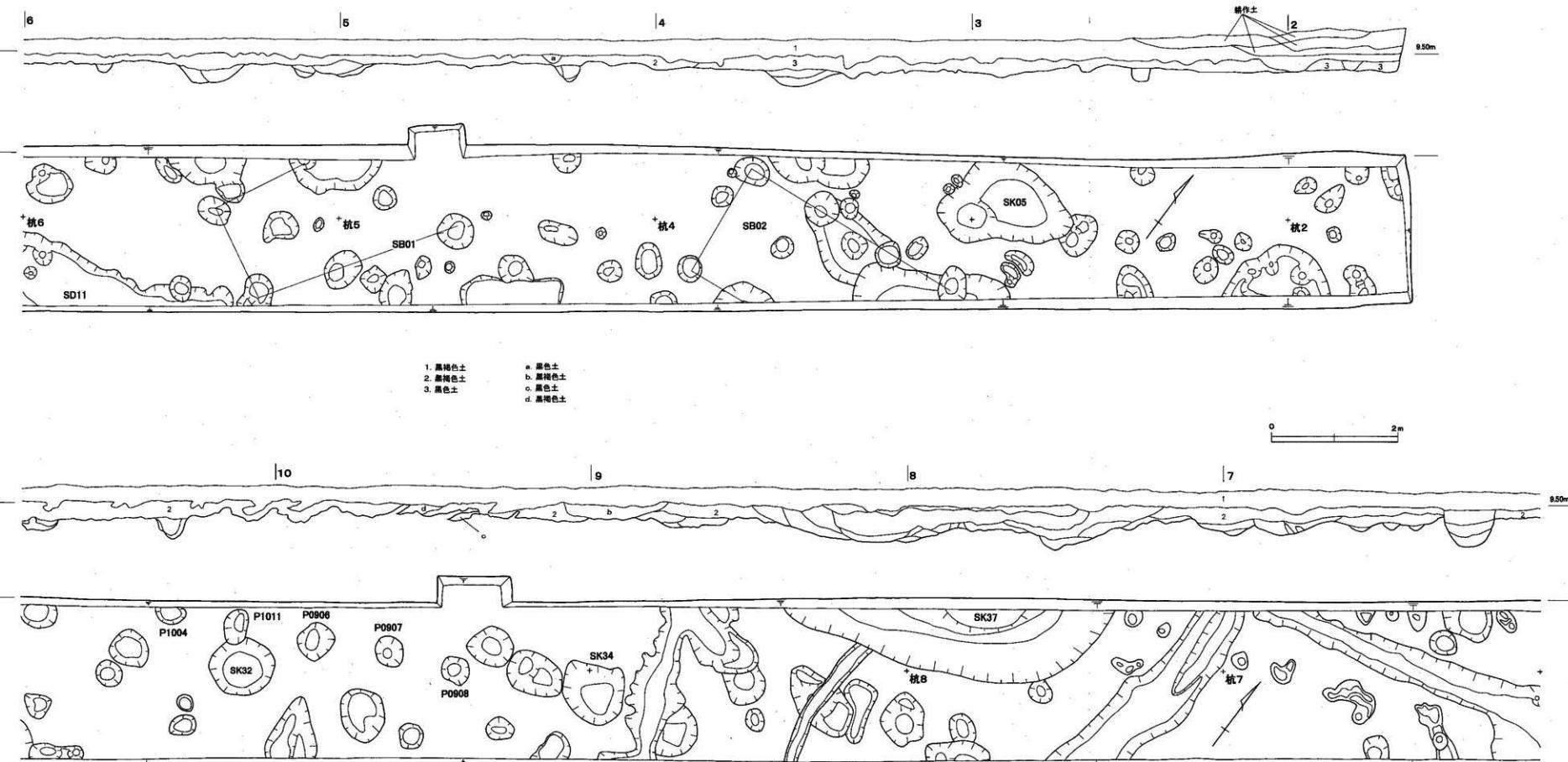
なお、4区の中央付近で市道をまたがった箇所には、1988年に範囲確認調査が行われた際に、第3トレンチが配置されている。

調査にあたっては、まず、重機により表土掘削を終えた後に、調査区内に5m間隔で一列に基準杭を設置した。その後、包含層以下では手掘りにて掘削を進めたところ、標高9.10m～9.30m付近で地山に至ると同時に遺構が検出できた。よって、この面を調査面として各遺構の調査を行い、これらの成果を田畠遺跡4区遺構配置図にまとめた。また、調査区北壁を土層堆積状況把握のために分層を行い調査区断面図を作成したため、この成果もあわせて示した。

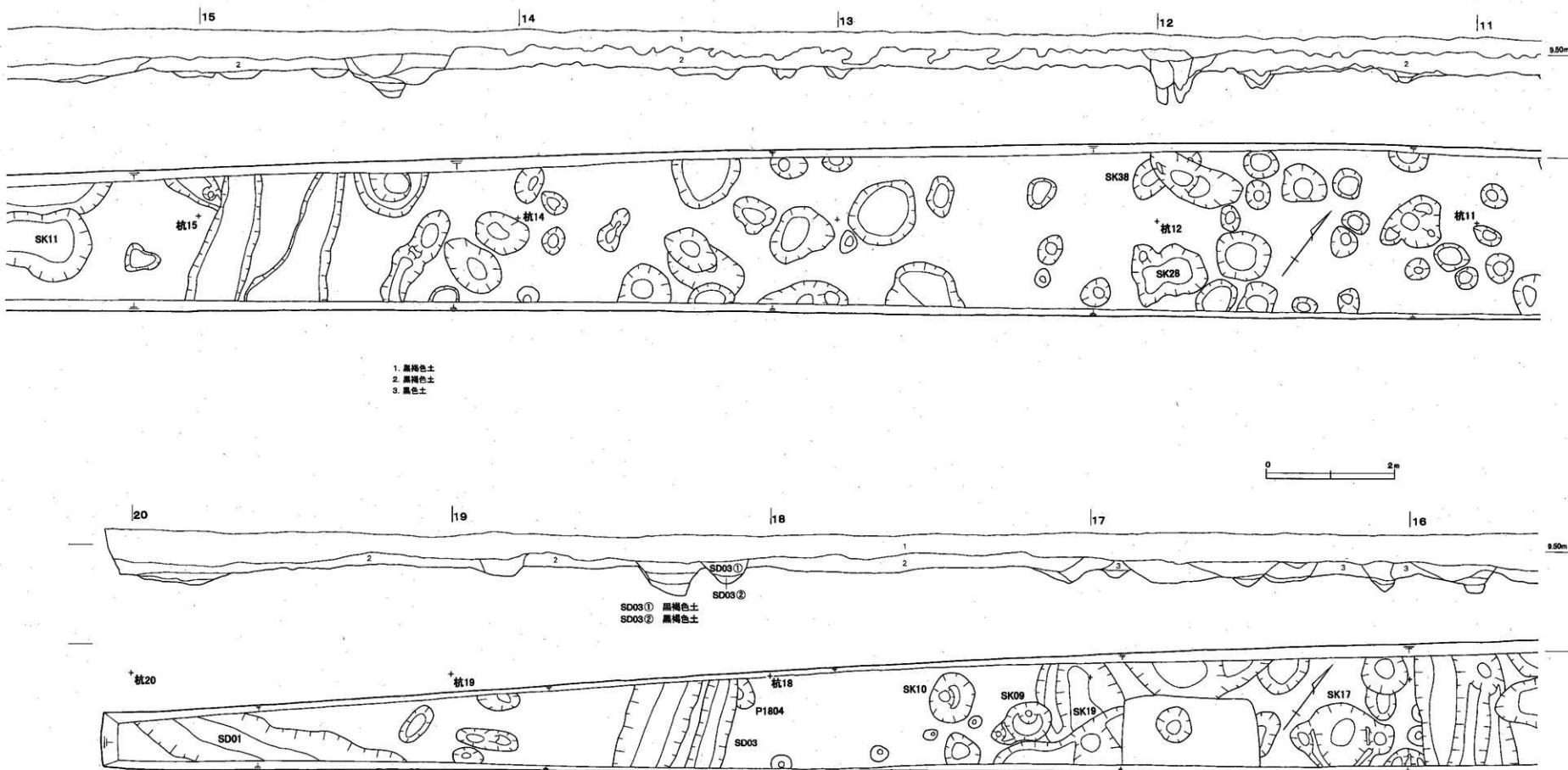
なお、4区の調査に用いた基準杭の座標は表4に示すとおりである。

杭名称	X座標	Y座標	杭名称	X座標	Y座標
杭 1	-73350.470	52195.139	杭11	-73380.108	52154.871
杭 2	-73353.433	52191.112	杭12	-73383.072	52150.844
杭 3	-73356.397	52187.085	杭13	-73386.036	52146.817
杭 4	-73359.361	52183.059	杭14	-73389.000	52142.790
杭 5	-73362.325	52179.032	杭15	-73391.964	52138.763
杭 6	-73365.289	52175.005	杭16	-73394.928	52134.737
杭 7	-73368.253	52170.978	杭17	-73397.892	52130.710
杭 8	-73371.217	52166.951	杭18	-73400.856	52126.683
杭 9	-73374.181	52162.924	杭19	-73403.820	52122.656
杭10	-73377.145	52158.898	杭20	-73406.784	52118.629

表4 田畠遺跡4区基準杭座標一覧



第154図 田畠遺跡4区遺構配置図1 (1:50)



第155図 田畠遺跡4区造構配置図2 (1:50)

4区の遺構と遺物

4区は田畠遺跡の中央付近を貫いていると考えられ、遺構が検出される標高も他区と比較し高い。土坑やピットが多数発見できることから、居住域として利用されていた可能性が強い。

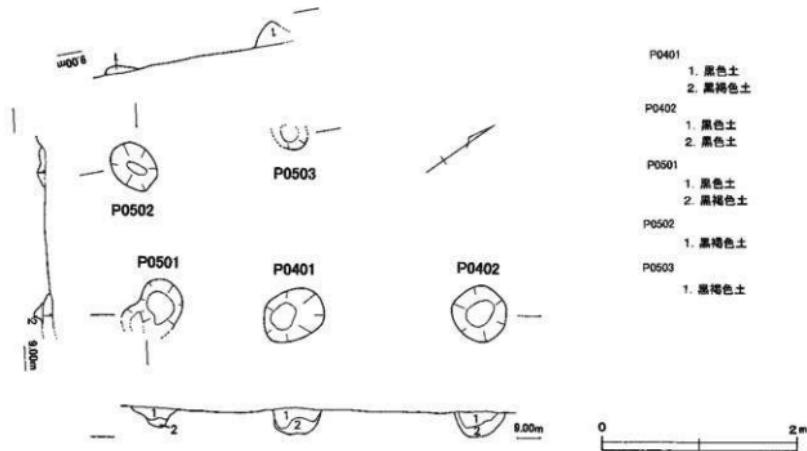
以下、残存状態の良い遺物を伴う遺構を中心に、掘立柱建物跡、土坑、ピット、溝状遺構の順に報告する。

掘立柱建物跡

SB01（第156図）

SB01は4Grから5Grの標高9.30mの調査面において検出したP0401、P0402、P0501、P0502、P0503によって形成される掘立柱建物跡と思われる遺構である。N-35°-E方向に主軸をとり、梁間1間（1.5m）以上×桁行2間（3.3m）の規模を有するものと考えられる。柱穴は径40cm～60cm程度の不整な円形プランを呈しており、深さは最も深いものでも30cmと浅いため、かなりの削平を受けているようである。

出土遺物は少なくP0401とP0402において土器の小片が1点ずつ出土しただけであるため、遺構の時期は不明である。

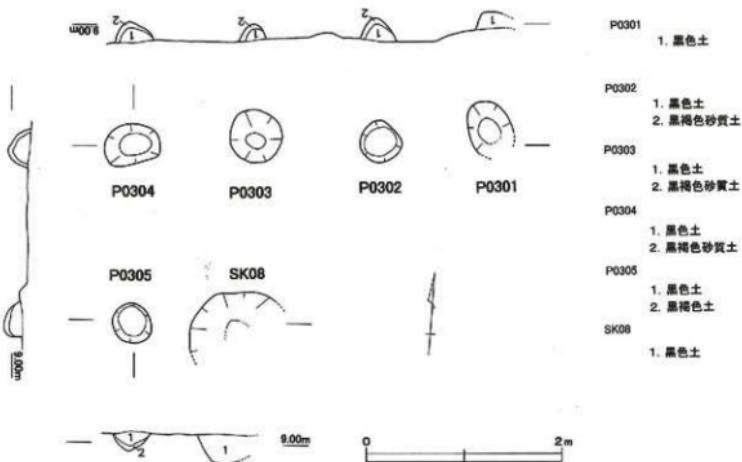


第156図 SB01実測図 (1:50)

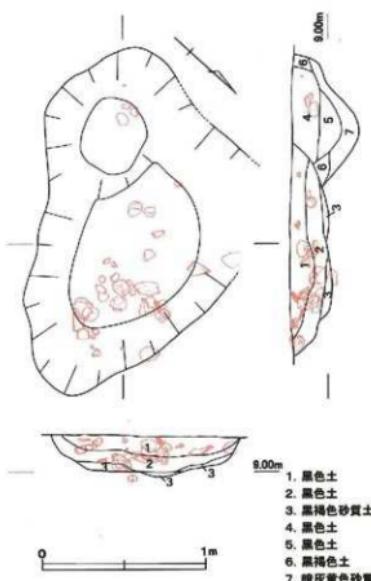
SB02（第157図）

SB02は3Grの標高9.18mの調査面において検出したP0301、P0302、P0303、P0304、P0305によって形成される掘立柱建物跡である。N-84°-E方向に主軸をとる梁間1間（1.8m）以上×桁行3間（3.6m）以上の規模を測ると考えられる。柱穴は径40cm～50cm程度の不整な円形プランを呈しており、削平を受けているため深さはいずれも20cm前後と浅い。

P0301、P0302、P0304において弥生土器と思われる土器の破片が1点づつ出土しているが、いずれも小片であるため、遺構の時期は不明である。



第157図 SB02実測図 (1:50)



第158図 SK05実測図 (1:30)

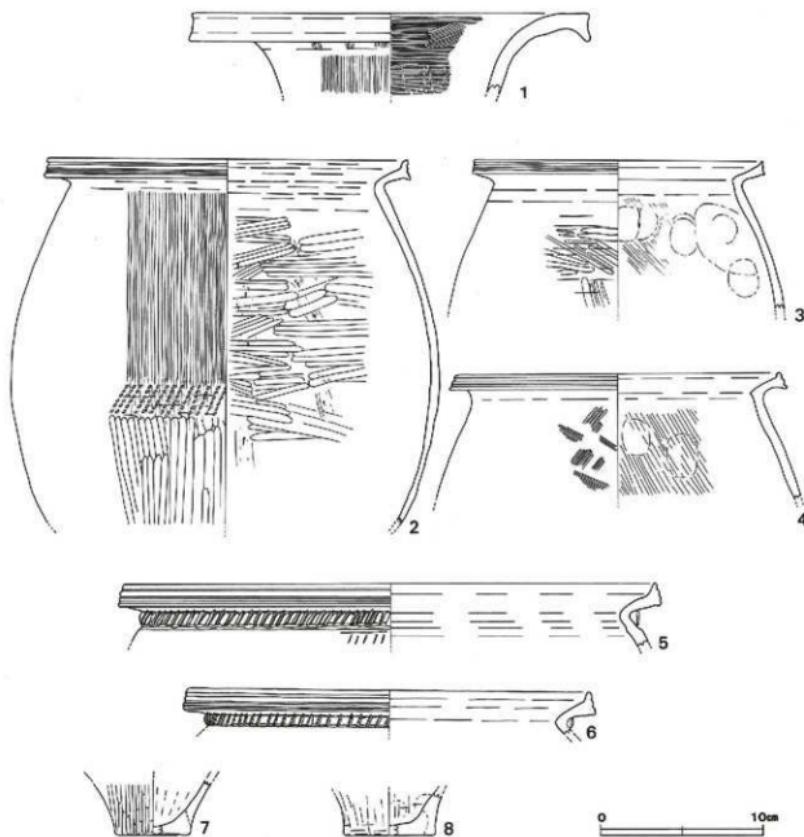
土坑

SK05 (第158・159図)

2Grから3Grにかけての調査区北壁際標高9.23mの調査面においてSK05を検出した。N-61°-E方向に長い不整形な平面プランを呈しており、検出規模は長さ226cm、幅120cm以上を測る。深さは遺構南西寄りが最も落ち込み42cmを測るが、北東寄りは25cmと浅い。調査時は1基の土坑として取り扱ったが、長軸断面を観察すると、2基の土坑が切り合っていることが判明した。

出土遺物は新しい方の土坑を中心に、ビニール袋半分程度の弥生土器片が出土しており、このうち実測可能なものを159-1～159-8に図示した。中期後葉のものがほとんどで、新しい方の土坑の時期を示していると考えられる。

なお、159-1は他のものより古いため、本来、古い方の土坑に伴っていた可能性も考えられる。

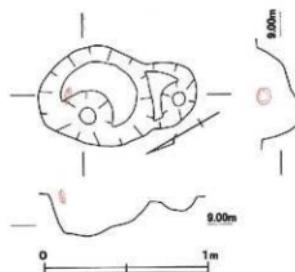


第159図 SK05出土弥生土器実測図 (1:3)

SK09 (第160・161図)

17Grの標高9.13mの調査面において、SK19を切った状態でSK09を検出した。N-21°-E方向に長い不整な楕円形の平面プランを呈しており、検出規模は長径97cm、短径62cmを測る。遺構北寄りで最も落ち込み、この箇所の深さは25cmであり、側壁は遺構東寄りで変則的に立ち上がる。

覆土からは土器の小片数点のほか、161-1に示す古銭が1点出土している。風化が著しく文字が不明瞭なため、詳細は不明である。



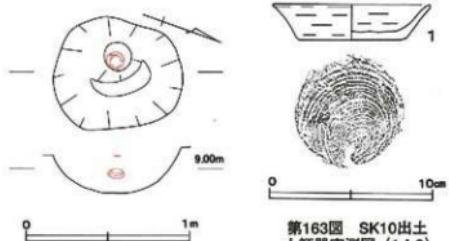
第160図 SK09実測図 (1:30)



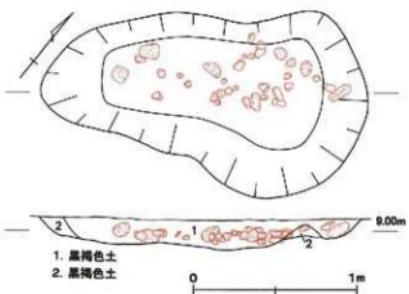
1



第161図 SK09出土古銭拓影 (1:1)



第162図 SK10実測図 (1:30)



第164図 SK11実測図 (1:30)

SK10 (第162・163図)

17Grの標高9.12cmの地山面においてSK10を検出した。N-27°-W方向に長く、検出規模は長さ79cm、幅69cm、深さ27cmを測る。坑底は丸味を帯び、側壁は曲面をなして立ち上がりっている。

覆土からは数点の土器片のほか、163-1に示す土師器の壊が出土した。器壁は底部から口縁部にかけて外反して立ち上がり、底面には回転糸切り痕が残る。8世紀から9世紀の所産と考えられ、遺構の時期を示すものであろう。

SK11 (第164・165図)

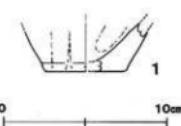
15Grの標高9.08mの調査面で隣接する遺構を切った状態でSK11を検出した。N-56°-E方向に長い不整形な平面プランを呈しており、検出規模は長さ197cm、幅60cm~110cmを測り、深さは20cmと浅い。坑底には凹凸を有しており、側壁の立ち上がりは比較的緩やかである。

2層に分層可能な覆土からは、土器のごく小片1点のほか、165-1に示す弥生土器の甕底部片が出土している。遺物の出土量が少ないため、遺構の時期や性格については不明である。

SK17 (第166~168図)

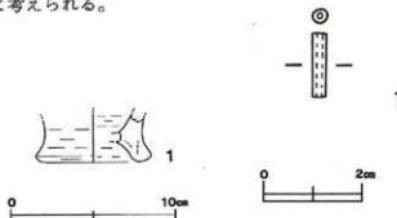
16Grの調査区南壁際標高9.08mの地山面でSK17を確認した。検出時にはN-53°-E方向に長いいびつな平面プランを呈する長さ159cm、幅90cm以上の遺構として捉えていたが、断面を観察すると、北東と南西寄りで2基のビットが1基の土坑を切っている様子が観察できた。土坑の深さは

75cmと深く、側壁の立ち上がりは急である。



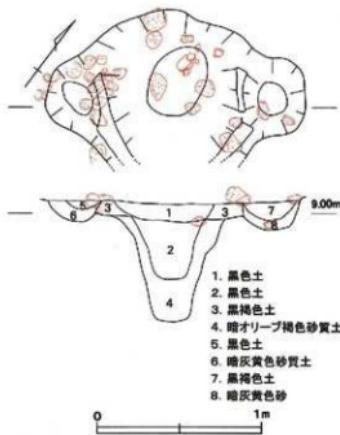
第165図 SK11出土弥生土器実測図 (1:3)

4層に分層可能な土坑の覆土からは、管玉1点と少量の弥生土器片が出土しており、実測可能なものを図示した。167-1は碧玉製の管玉で長さ1.3cm、径0.3mm、孔径1mmを測る。168-1は器種不明であるが低い台を有する底部片であり中期のものと思われる。これら出土遺物は遺構の時期を示すと考えられる。



第168図 SK17出土
弥生土器実測図 (1:3)

第167図 SK17出土管玉
実測図 (1:1)

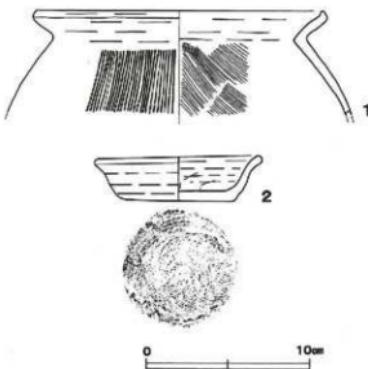


第166図 SK17実測図 (1:30)

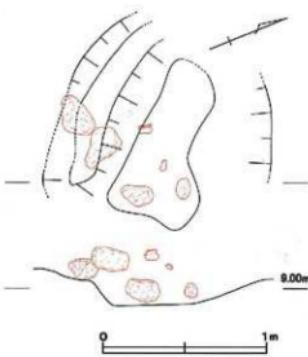
SK19 (第169・170図)

16Grから17Grにかけての調査区北壁際標高9.11mの調査面において、SK09などに切られた状態のSK19を検出した。一部の検出にとどまっており詳細は不明であるが、推定で長さ150cm程度、幅130cm程度を測るものとみられる。坑底は調査区内ではば検出できており、深さは22cmを測る。また、側壁の立ち上がりは北寄りで緩やかであるが、南寄りでは変則的である。

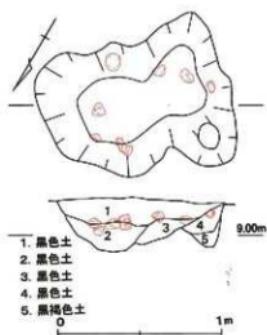
覆土からは少量の弥生土器、土師器の小片が出土しており、このうち実測可能なものを図示した。170-1は弥生土器の壺であり中期中葉のものと考えられる。170-2は完形で出土した土師器の壺である。8世紀から9世紀頃のものと考えられ、遺構の時期を示す可能性がある。



第170図 SK19出土土器実測図 (1:3)



第169図 SK19実測図 (1:30)



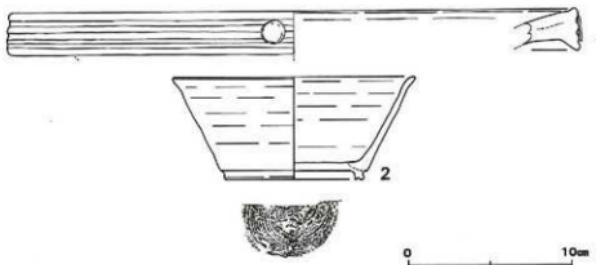
第171図 SK28実測図 (1:30)

SK28 (第171・172図)

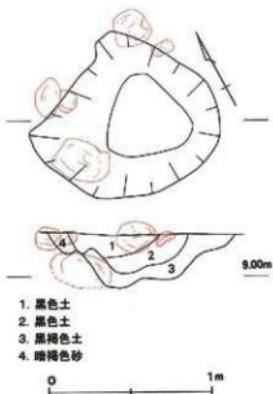
11Grから12Grにかけての標高9.21mの地山面において、いびつな平面プランを呈するSK28を検出した。N40°E方向に長く、検出規模は長さ110cm、幅83cm、深さ31cmを測る。坑底は凹凸を有しており、側壁の立ち上がりはやや急である。

5層観察できる覆土からは、図示した2点の土器片が出土した。172-1は弥生土器の広口壺口縁部である。端部は下方に拡張し、端面には3条の凹線文が施され、円形浮文が貼り付けられている。中期後葉のものと考えられる。172-2は須恵器の壺であり、比較的大きな破片で出土した。回転糸切り痕が残る底面の外縁付近に高台を貼り付け、器壁は底部から体部にかけて直線的に立ち上がるが、口縁部ではやや外反し開口する。9世紀頃の所

産と考えられる。この須恵器は先の弥生土器より下層で出土しており、残存状態も良いことから、遺構の時期を示す可能性がある。



第172図 SK28出土土器実測図 (1:3)

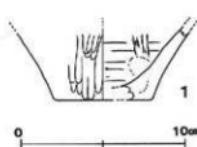


第173図 SK34実測図 (1:30)

SK34 (第173・174図)

8Grから9Grにかけての標高9.25mの地山面において、SK34を検出した。不整形な平面プランを呈しており、検出規模は長さ117cm、幅102cm、深さ32cmを測る。坑底には凹凸を有し側壁は変則的に立ち上がっている。

4層観察できる覆土からは弥生土器の小片が数点出土しているが、図化に耐えるものは174-1に示す壺の底部片のみである。中期後半のものと考えられるが、残存状態が悪いため遺構の時期を示すとは言い切れない。

第174図 SK34出土
弥生土器実測図 (1:3)

SK37 (第175・176図)

7Grから8Grにかけての調査区北壁際標高9.47mの調査面において、他の造構を切った状態でSK37を検出した。検出時には大型の土坑として捉えていたが、完掘すると調査区北壁際に高まりが認められ、その周囲を溝が巡る構造をなすと思われる。この溝は上幅90cm、深さ60cm～70cmを測り、側壁の立ち上がりは内側で急であるが、外側では比較的緩やかである。

また、溝の中層以下に2cm～10cm程度の礫が多量に包含されているのが特徴的である。

出土遺物については、覆土の中層以上から土師器、須恵器、陶磁器などの小

片がビニール袋半分程度

出土しており、これらの

うち掲載が必要と思われ

るものについてのみ図示

した。176-1は伊万里焼

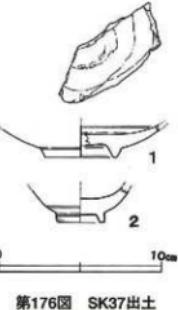
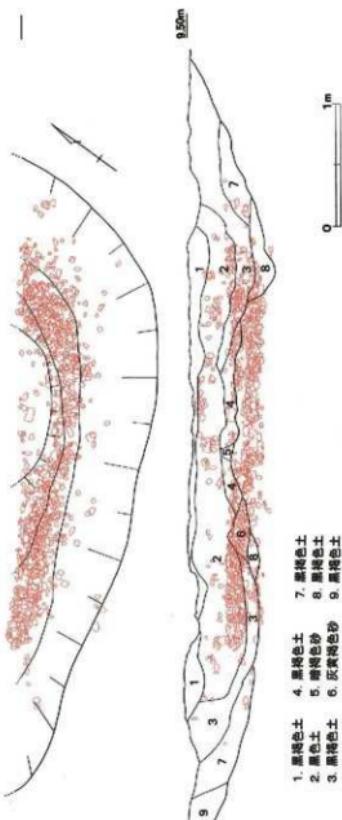
の皿である。17世紀代の

所産と思われ、造構の時

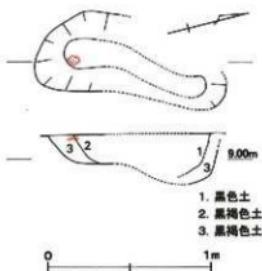
期はこれ以降と考えられ

るが、造構の性格は不明

である。

第176図 SK37出土
陶磁器実測図 (1:3)

第175図 SK37実測図 (1:40)



第177図 SK38実測図 (1:30)



第178図 SK38出土弥生土器実測図 (1:3)

るが、N-33°-E 方向に長く、規模は推定で長さ 115cm 程度、幅 50cm 程度を測るものとみられる。深さは北寄りの最下底で 31cm を測り、側壁の立ち上がりは急である。

3 層に分層可能な覆土からは数点の弥生土器片が出土した。178-1 は甕の口縁部片である。口縁端面に 2 条の浅い凹線文が巡らされている。中期後葉のものと思われる遺構の時期を示す可能性がある。

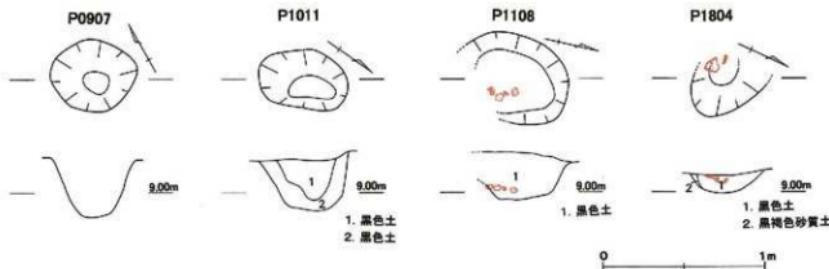
ピット（第179・180図）

P0907 は標高 9.21m の地山面で検出した。平面プランは不整な円形を呈しており、検出規模は径 45 cm、深さ 36cm を測る。覆土からは 180-1 に示す中期後半の弥生土器が 1 点出土している。

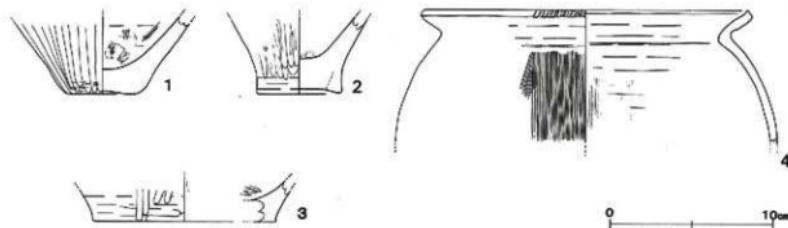
この遺構は約 120cm 間隔で配された P0906、P0907、P0908、P1004、P1011 とともに N-65°-E 方向に並ぶことから、掘立柱建物跡を形成する可能性があるが、P1011 を除くピットからの出土遺物がないため、時期は不明である。

P1011 は標高 9.20m の調査面において、SK32 を切った状態で確認した。平面プランは梢円形を呈しており、検出規模は長径 56cm、短径 35cm、深さ 31cm を測る。2 層に分層可能な覆土からは数点の土器の小片が出土したが、実測可能なものは 180-2 に示した弥生土器の底部片のみである。底の器肉は厚くやや上げ底気味であり、外面にはミガキ調整が施されている。中期後半のものと思われるが、遺構の時期を示すかは不明である。

なお、この遺構は P0907 などとともに掘立柱建物跡を形成する可能性がある。



第179図 主要ピット実測図 (1:30)



第180図 主要ピット出土弥生土器実測図 (1:3)

P1108は調査区南壁際標高9.23mの地山面で検出した。部分的な調査にとどまつたが、平面プランは梢円形を呈すると思われ、検出規模は推定で長径75cm、短径55cmであり、深さは28cmを測る。1層のみ観察できる覆土からは弥生土器の小片が2点出土しており、このうち実測可能なものを180-3に図示した。中期後半のものと考えられ、遺構の時期を示す可能性がある。

P1804は標高9.12mの調査面において、SD03に切られた状態で検出した。部分的な調査にとどまつたため、平面プランや規模は不明であるが、深さは13cmを測る。2層に分層可能な覆土からは、180-4に示した弥生土器片が1点出土した。甕の口縁部から削部上半にかけての破片であり、口縁端面には刻目文が巡らされている。中期中葉のものと考えられ、遺構の時期を示すと思われる。

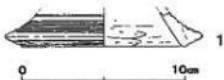
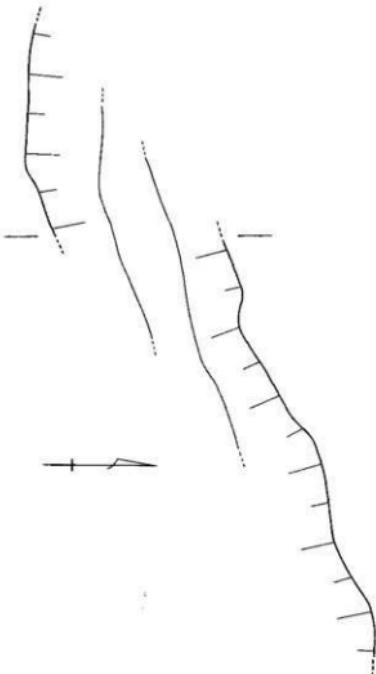
溝状遺構

SD01（第181・182図）

19Grの標高9.08mの地山面において、SD01を検出した。調査区を横切っているため、長さ420cmのごく一部の調査にとどまっているが、N-75°-E方向に軸をとるようである。検出規模は上幅が推定90cm、下幅30cmを測り、標高8.84mで底を有する。また、側壁の立ち上がりが緩やかであるため、断面形は皿状を呈している。

人工的に埋められたものと考えられる覆土からは、土器のごく小片が3点出土したため、実測可能なものを182-1に図示した。弥生土器の高环脚部片と考えられ、外面に5条以上の凹線文が認められる。また、端部に平坦面を有しており、ここにも2条の浅い凹線文が巡らされている。中期後葉のものと考えられるが、出土遺物の絶対数が少ないため、遺構の時期を示すかどうかは不明である。

なお、遺構の性格については区画溝と思われる。



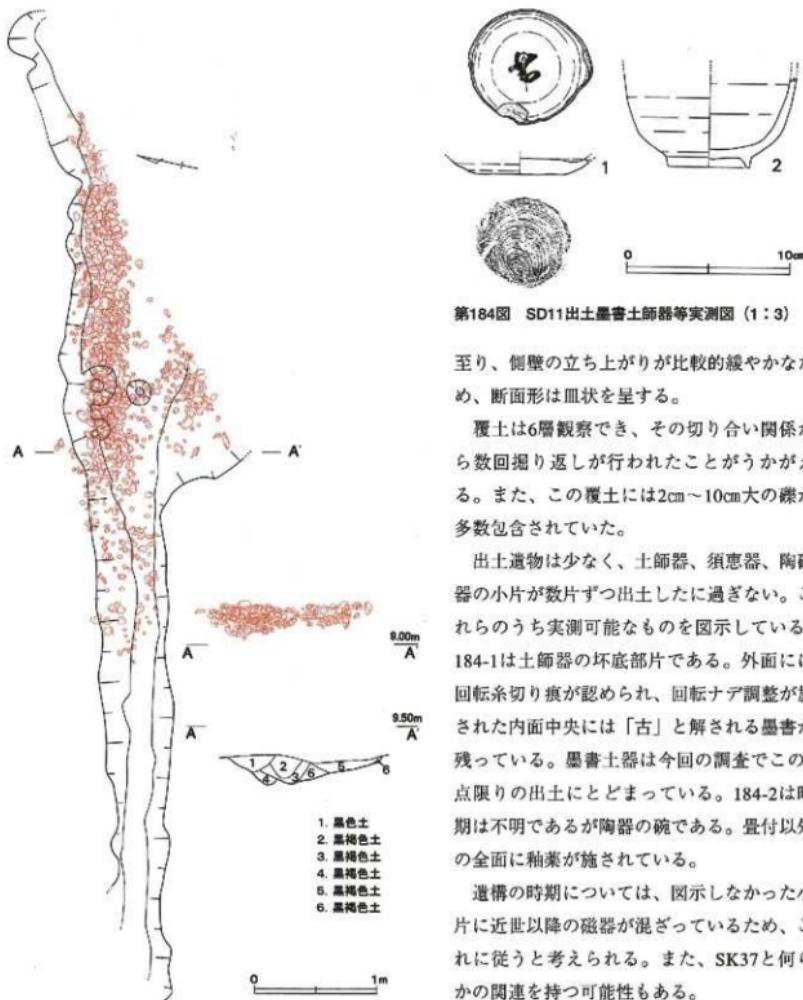
第182図 SD01出土弥生土器
実測図 (1:3)



第181図 SD01実測図 (1:30)

SD11（第183・184図）

5Grから6Grにかけての標高9.25mの調査面においてSD11を検出した。調査区を斜めに横切っているため、長さ570cmの一部の調査にとどまっている。N-75°E方向に軸をとり、検出規模は上幅55cm程度、下幅20cm程度であるが、調査区南壁付近では上幅、下幅ともに広がっている。標高9.03m付近で底に



第184図 SD11出土墨書き器等実測図（1:3）

至り、側壁の立ち上がりが比較的緩やかなため、断面形は皿状を呈する。

覆土は6層観察でき、その切り合い関係から数回掘り返しが行われたことがうかがえる。また、この覆土には2cm～10cm大の礫が多数包含されていた。

出土遺物は少なく、土師器、須恵器、陶磁器の小片が数片ずつ出土したに過ぎない。これらのうち実測可能なものを図示している。184-1は土師器の坏底部片である。外面には回転糸切り痕が認められ、回転ナデ調整が施された内面中央には「古」と解される墨書きが残っている。墨書き土器は今回の調査でこの1点限りの出土にとどまっている。184-2は時期は不明であるが陶器の碗である。蓋付以外の全面に釉薬が施されている。

造構の時期については、図示しなかった小片に近世以降の磁器が混ざっているため、これに従うと考えられる。また、SK37と何らかの関連を持つ可能性もある。

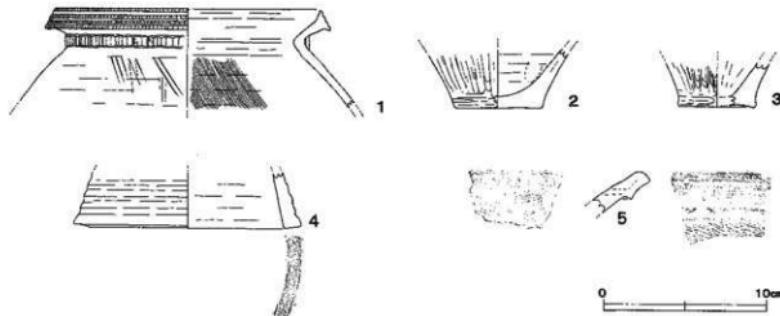
第183図 SD11実測図（1:40）

4区遺構外の出土遺物

4区の遺構外出土遺物は少なく、コンテナ半分に満たない。弥生土器と土師器の占める割合が高く、次いで須恵器、陶磁器が少量出土している。土器以外には、石製品と鉄製品がそれぞれ1点ずつ出土している。なお、土器の図示にあたっては若干の選別を行っている。

弥生土器等（第185図）

185-1～185-4には弥生土器を取り上げた。185-1は壺の口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁端部は上下に拡張し、端面に3条の凹線文と刻目文が巡らされている。また、頸部外面に突帯文が貼り付けられている。185-2・185-3は底部片である。いずれも平底で外面はミガキ調整が施されている。185-4は高壺の脚部片である。外面に4条以上の深い凹線文が巡らされ、端部の平坦面にはクシ



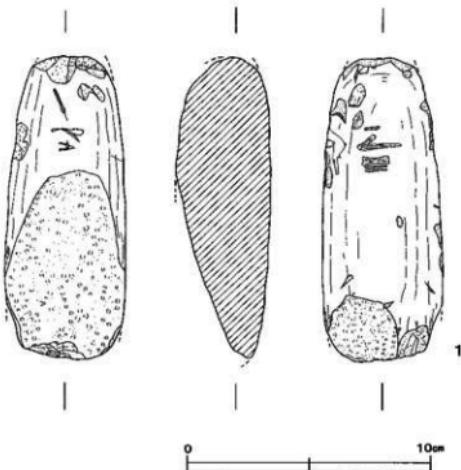
第185図 4区遺構外出土弥生土器等実測図（1：3）

状工具による波状文が施されている。以上、弥生土器はいずれも中期後半のものである。

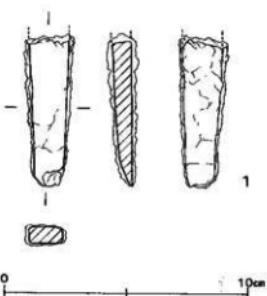
185-5には須恵器を取り上げた。器種は不明であるが口縁部片である。器壁は大きく外反し開口すると思われ、端部に平坦面を有する。また、外面には波状文が施される。

石製品（第186図）

石製品は1点のみ出土しており、186-1に図示した。先端部を欠くが变成岩製の片刃の石斧である。刃部には敲打痕が残るが、それ以外は研磨が施されている。



第186図 4区遺構外出土石製品実測図（1：2）



鉄製品（第187図）

鉄製品は1点のみ出土しており、187-1に図示した。身の部分と先端部分が一部欠けているが鑿と考えられる。身の断面は長方形を呈しているが、幅は先に向かうほどやや狭まっている。全面を鏽が覆い不明瞭であるが、刃は片刃であることが確認できる。なお、時期については不明である。

第187図 4区遺構外出土
鉄製品実測図 (1:2)

田畠遺跡5区

5. 5区の調査結果

調査区の概要と遺構配置（第188～190図）

5区は4区の西に位置しているが、市道浅柄古志線南沿いの調査区であり、南には畠が広がる。市道のカーブ部分にあたるため、調査区北壁が弓形になっている。この調査区においても、調査対象地の境界から50cm程度のゆとりをとって調査を実施しているため、調査区の規模は長さ61m、幅1.5m～5mを測り、面積は210m²である。

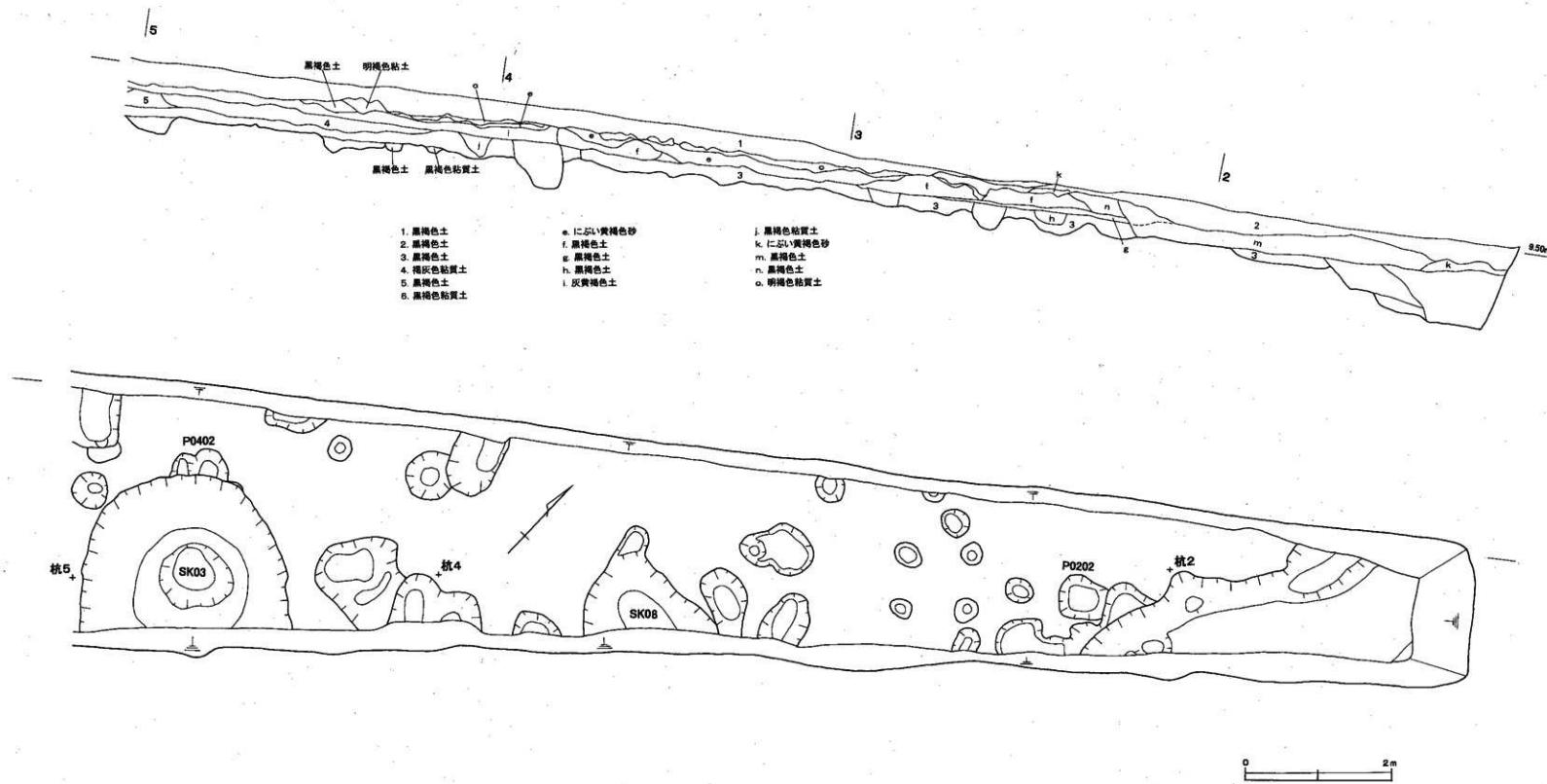
なお、5区の中心付近には、1988年に範囲確認調査が行われた際に第4トレンチが設置されている。

調査にあたっては、まず、重機により表土掘削を行った後に、調査区内に5m間隔で一列に基準杭を設置した。その後、遺物包含層以下については手掘りで掘削を行ったところ、標高8.85m～9.00m付近で地山面に達すると同時に遺構が確認できた。よって、この面を調査面として各遺構の調査を行い、この成果を田畠遺跡5区遺構配置図にまとめた。また、調査区北壁を土層堆積状況確認のため精査を行い調査区断面図を作成したため、この成果もあわせて示した。

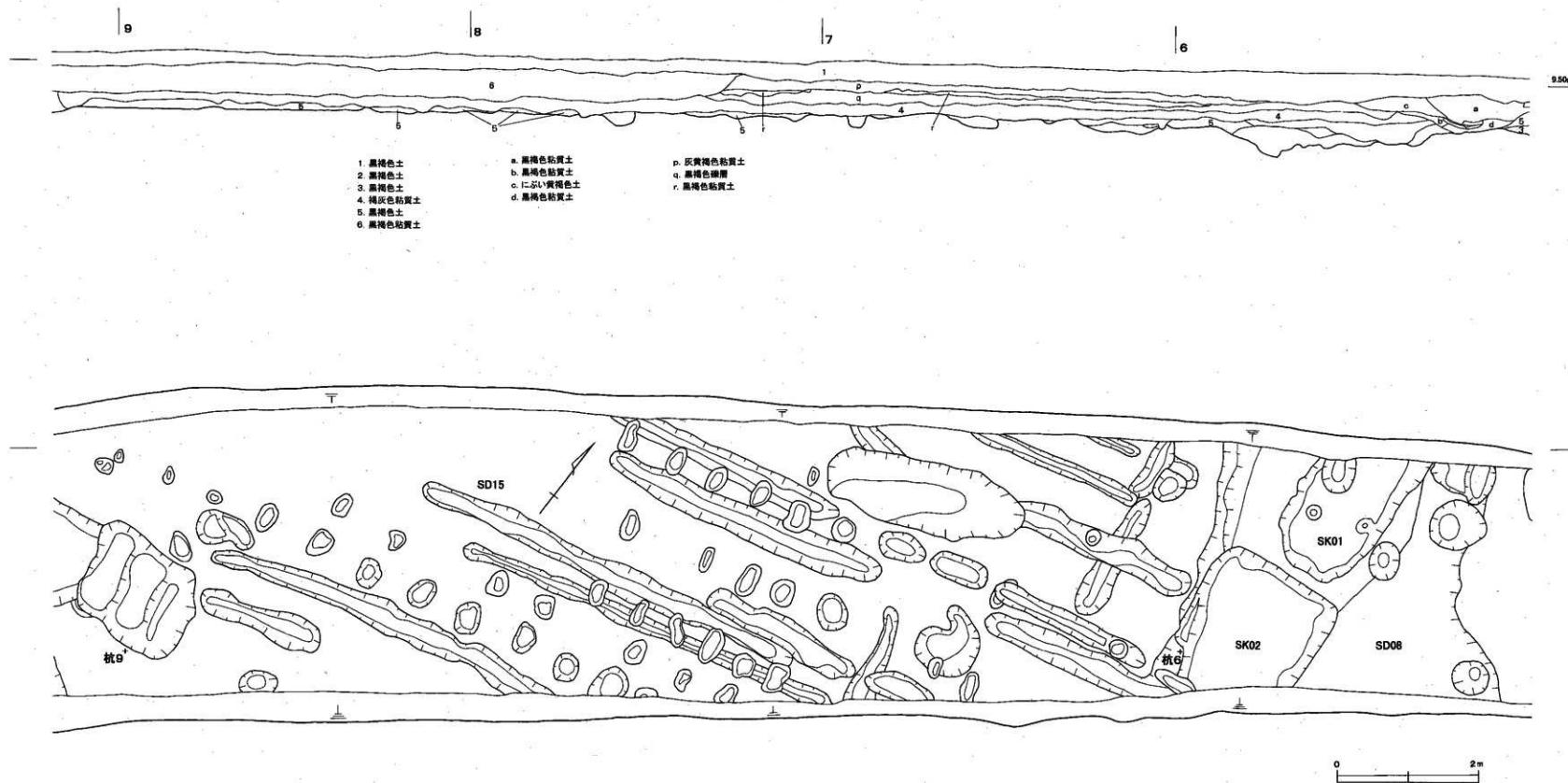
なお、5区の調査に用いた基準杭の座標は表5に示すとおりである。

杭名称	X座標	Y座標	杭名称	X座標	Y座標
杭 1	-73421.856	52115.302	杭11	-73457.445	52080.182
杭 2	-73425.415	52111.790	杭12	-73461.004	52076.670
杭 3	-73428.974	52108.278	杭13	-73464.563	52073.158
杭 4	-73432.533	52104.766			
杭 5	-73436.092	52101.254			
杭 6	-73439.650	52097.742			
杭 7	-73443.209	52094.230			
杭 8	-73446.768	52090.718			
杭 9	-73450.327	52087.206			
杭10	-73453.886	52083.694			

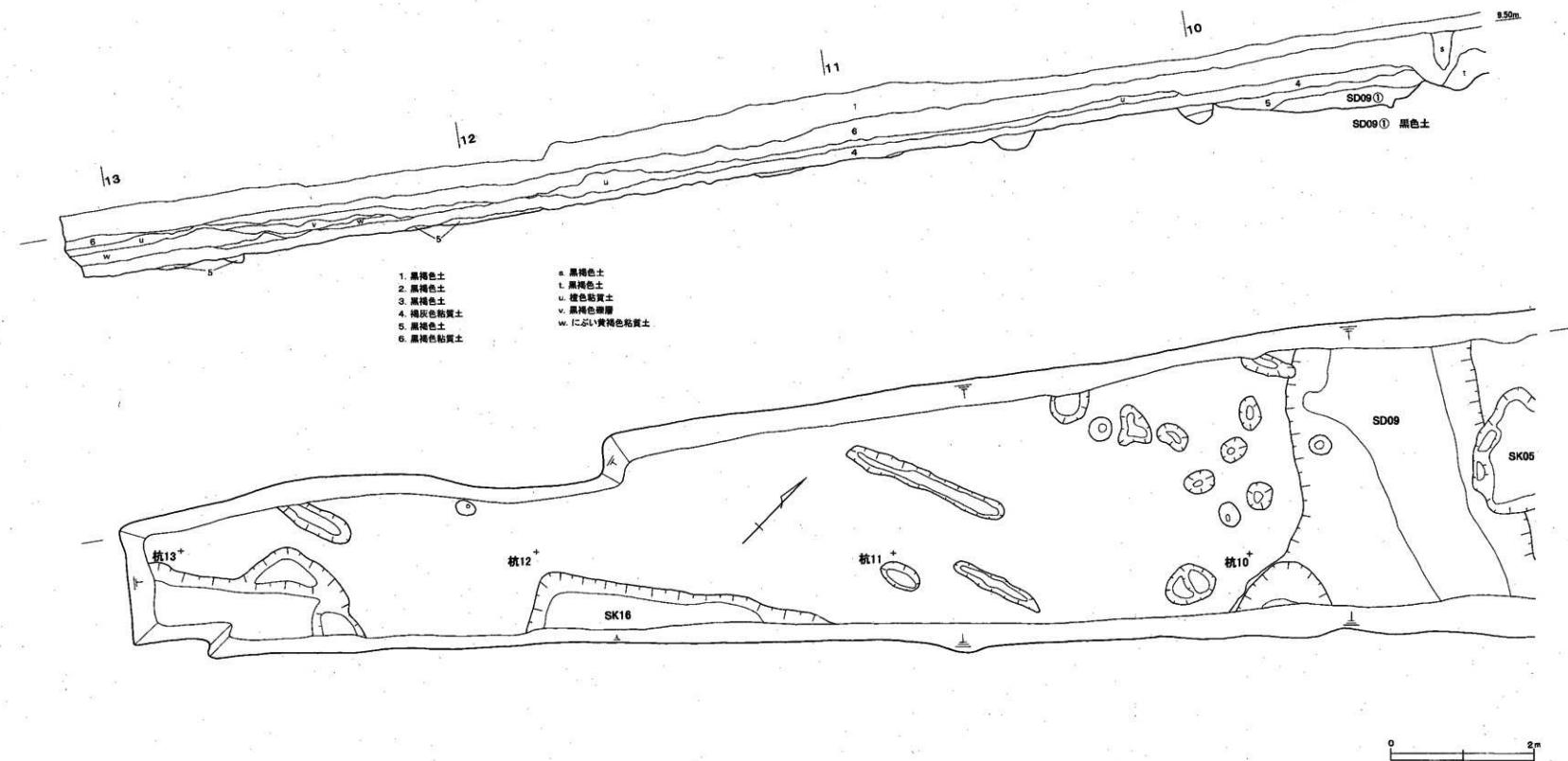
表5 田畠遺跡5区基準杭座標一覧



第188図 田畠遺跡5区遺構配置図1 (1:50)



第189図 田畠遺跡5区遺構配置図2 (1:50)



第190図 田畠遺跡5区遺構配置図3 (1:50)

5区の遺構と遺物

5区は1988年に範囲確認調査が行われた際に、第4トレンチが設置された個所である。東方の調査区と比較し遺構の密度も疎になりつつあり、田畠遺跡東端付近であることがうかがえる。以下、図示可能な遺物を出土する遺構を中心に、井戸跡、土坑、ピット、溝状遺構の順に報告する。

井戸跡

SK03 (第191~193図)

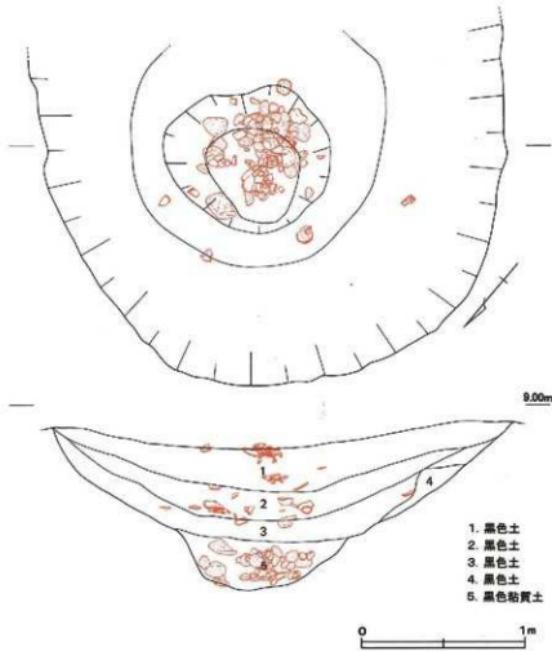
4Grの調査区南壁際標高8.88mの調査面において、P0402を切った状態でSK03を検出した。遺構の一部は調査区外に続いているが、円形の平面プランを呈するものと考えられる。検出規模は径280cm、深さ102cmを測り、底の標高は7.86mである。また、標高9.24m付近には段が認められ、ここから上端までの側壁の立ち上がりは緩やかである。

遺構の性格については、底付近で水が湧くことから井戸と考えられる。井筒が認められないため、素掘と思われるが、下層において20cm以下の砾が多数埋まっていたため、本来、部分的に石組みの井筒が形成されていた可能性はある。

覆土は5層確認でき、レンズ状の堆積が認められる。このためか、遺物は遺構の中央部分を中心に出土することが多く、その量はコンテナ半分弱に上る。出土遺物の大半は土師器であるが、弥生土器や須恵器の小片も少量出土している。これらのうち、実測可能なものは極力図示したが、土師器においては若干割愛したものがある。

192-1・192-2は弥生土器である。前者は壺であり、口縁部は単純に外反する。後者は底部片である。外面はミガキ調整、内面はナデ調整が施されている。両者とも中期後半のものであるが混入品と考えられる。

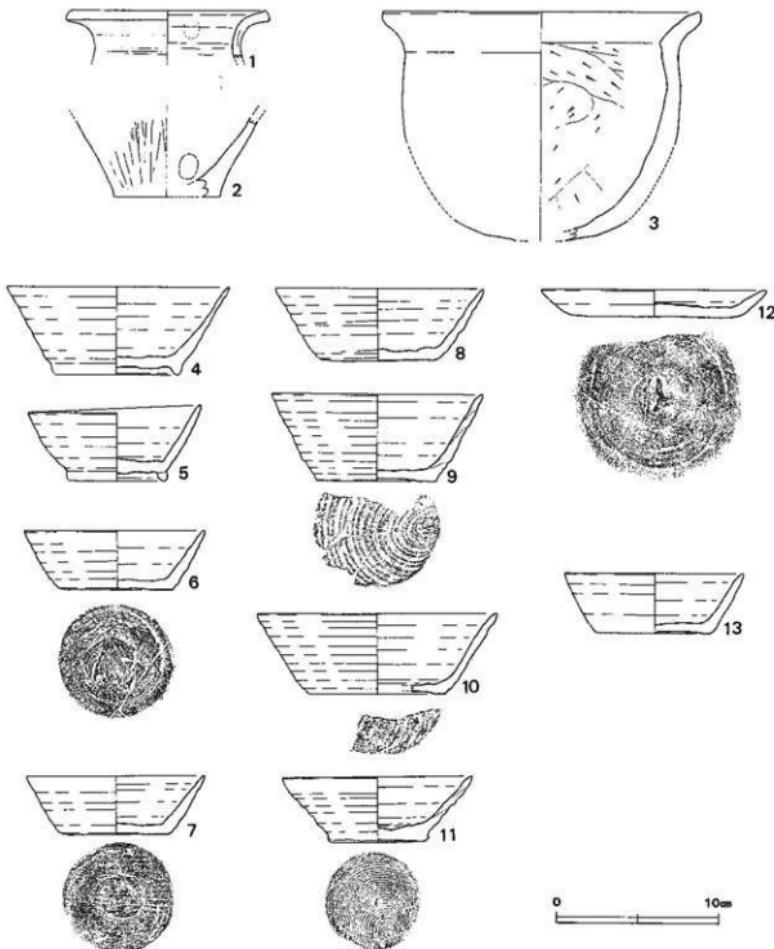
192-3~192-12には土師器を取り上げた。193-3は壺である。外面には煤の付着が認められ、頸部以下の内面にはケズリ調整が施されている。



第191図 SK03実測図 (1:30)

192-4・192-5は高台付壺であり、両者とも底面外縁に低い高台が貼り付けられている。統いて壺を示した。192-6～192-10は器壁が底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるが、192-11は底部をやや絞っている。192-12は皿である。器壁は口縁端部で薄くなり、底面の切り離し痕はナデ消されている。

192-13には須恵器の壺を示した。器壁は底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がっており、内外面には「十」字状に火摺が残る。



第192図 SK03出土土器実測図 (1:3)

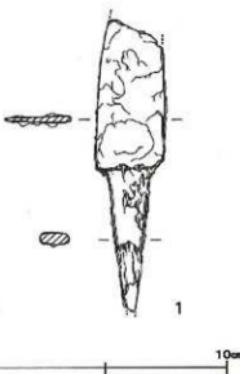
図示した土師器と須恵器はいずれも9世紀の所産と考えられ、完形に近い大きな破片で出土していることから、遺構の時期を示すと考えられる。

なお、鉄製品も1点出土しているので193-1に示した。刀子と考えられ、茎には柄の一部と思われる木片が薄く貼り付いているが、時期は不明である。

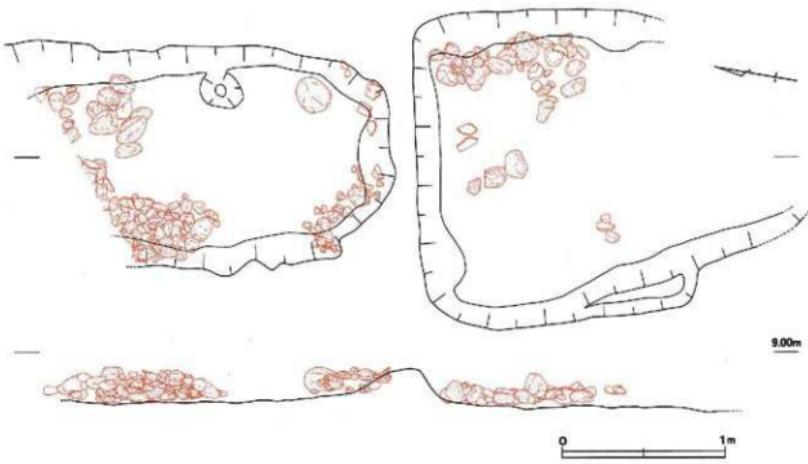
土坑

SK01（第194・195図）

5Grの調査区北壁際標高8.90mの調査面において、SD08を切った状態でSK01を検出した。遺構の一部が調査区外に及んでいるが、平面プランは不整な方形を呈するものと思われる。N-10°-W方向に長軸をとり、検出規模は長さ215cm以上、幅135cm、深さ



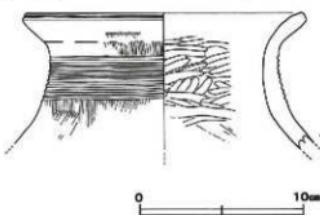
第193図 SK03出土鉄製品
実測図 (1:2)



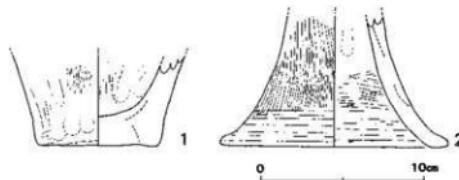
第194図 SK01・SK02実測図 (1:30)

21cmを測る。坑底は平坦であり、側壁の立ち上がりは比較的緩やかである。また、主に調査区北寄りで2cm~20cm大の礫が多数埋まっていたことが特徴的であった。

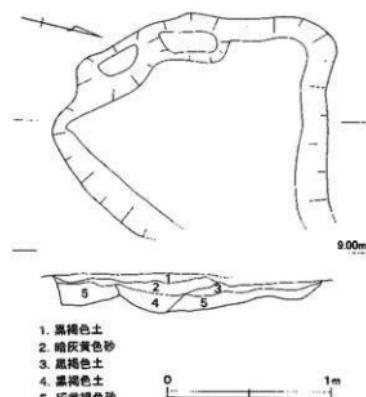
覆土は1層のみ観察でき、ここから須恵器の比較的大きな破片がビニール袋半分程度出土している。すべて大型の壺胴部片であり、礫の狭間から検出されることも多いことから、礫と一緒に廃棄された可能性が高い。しかし、この須恵器が遺構の時期を示すか否かは不明である。



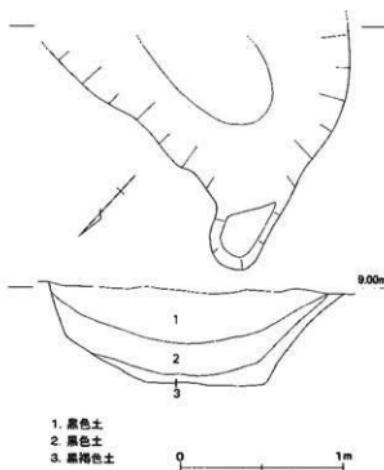
第195図 SK01出土弥生土器実測図 (1:3)



第196図 SK02出土弥生土器実測図（1:3）



第197図 SK05実測図（1:30）



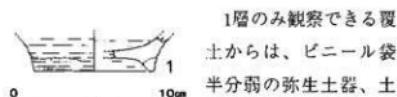
第199図 SK08実測図（1:30）

なお、この遺構からは弥生土器が1点出土したため、195-1に図示した。前期の臺と考えられ、残存状態も良いことから、付近の前期遺跡が存在することを示唆するものであろう。

SK02（第194・196図）

5Grの調査区南壁際標高8.90mの調査面において、SD08を切った状態でSK02を検出した。

部分的な調査にとどまっているが、平面プランはN-10°-W方向に長軸をとる方形を呈するものと推測され、南寄りでは幅が狭まっている。検出規模は長さ225cm、幅190cm、深さ25cmを測る。坑底は概ね平坦で、側壁の立ち上がりは比較的緩やかである。なお、この遺構からも礫が出土しているが、その量はSK01を下回る。



第198図 SK05出土

土師器実測図（1:3）

1層のみ観察できる覆土からは、ビニール袋半分弱の弥生土器、土師器、須恵器の破片が出土しており、このうち弥生土器2点が実測可能であったため図示した。196-1は前期、196-2は後期のものと考えられるが、須恵器が出土しているため、遺構の時期は平安時代以降と考えられる。

なお、SK02は長軸方向、覆土、礫の出土状況などについてSK01と共通しているため、両者は同一時期に同じ目的で築かれたと推定できる。

SK05（第197・198図）

9Grの標高8.86mの調査面において、SD09を切った状態でSK05を検出した。不整形な平面プランを呈しており、搅乱を受けているため一部の調査にとどまつたが、検出規模は長さ160cm程度、幅140cm、深さ22cmを測る。

覆土は5層確認でき、ここから少量の土師器、須恵器の小片が出土している。このうち唯一実測

可能であった土器片の塊を198-1に図示している。底面に高台が貼り付けられており、平安時代の所産と思われる。しかし、この土器片が遺構の時期を示すかどうかは不明である。

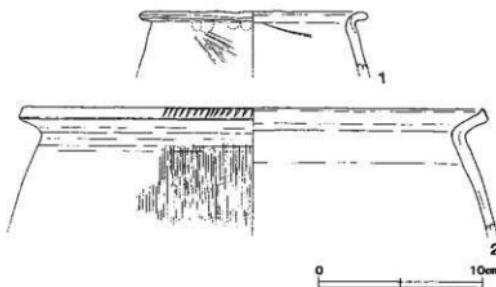
SK08（第199・200図）

3Grの調査区南壁際標高9.00mの地山面においてSK08を検出した。

一部の調査にとどまっているが、平

面プランはN-86°-W方向に長軸をとる楕円形を呈すると思われる。検出規模は長径160cm以上、短径140cm程度、深さ60cmを測り、坑底は平坦である。

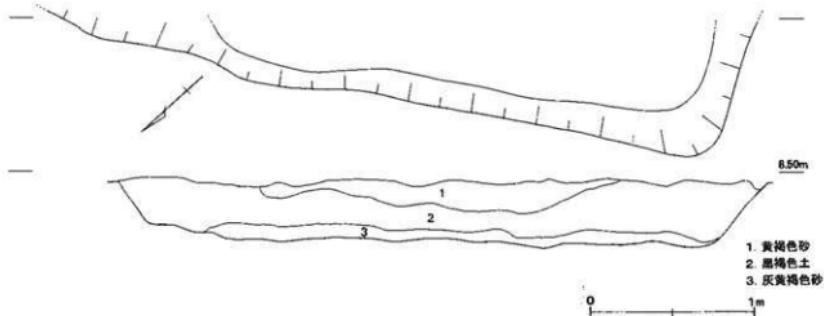
覆土は3層確認でき、ここから少量の弥生土器片が出土しており、実測可能なものを200-1・200-2に示した。両者とも弥生時代中期中葉の甕であり、遺構の時期を示すと思われる。



第200図 SK08出土弥生土器実測図（1:3）

SK16（第201・202図）

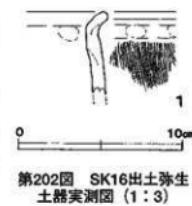
11Grの調査区南壁際標高8.44mの地山面においてSK16を検出した。遺構の大部分が調査区外に及んでいるため詳細は不明であるが、N-55°-E方向に長軸をとり、長さ420cm程度の長方形の平面プランを



第201図 SK16実測図（1:30）

呈すると思われる。深さは38cmを測り、平坦な坑底から側壁は急勾配で立ち上がりっている。

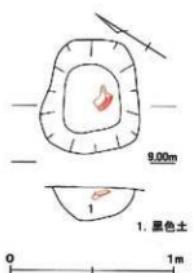
覆土は3層に分層可能で、ここから少景の弥生土器が出土している。いずれも小片であるため、図化可能なものは202-1に示した1点を数えるに過ぎない。前期の甕と考えられるが、その他の破片の中には後期のものも含まれているため、遺構の時期は弥生時代後期以降と推定される。



第202図 SK16出土弥生土器実測図（1:3）

ピット（第203・204図）

P0202は標高8.85mの調査面で検出した。丸味を帯びた長方形の平面プランを呈しており、検出規模は長さ70cm、幅55cm程度、深さ20cmを測る。覆土からは弥生土器の小片が数点出土したほか、204-1に示した比較的大きな破片も出土している。中期後葉のものであり遺構の時期を示すと考えられる。



第203図 P0202実測図 (1:30)

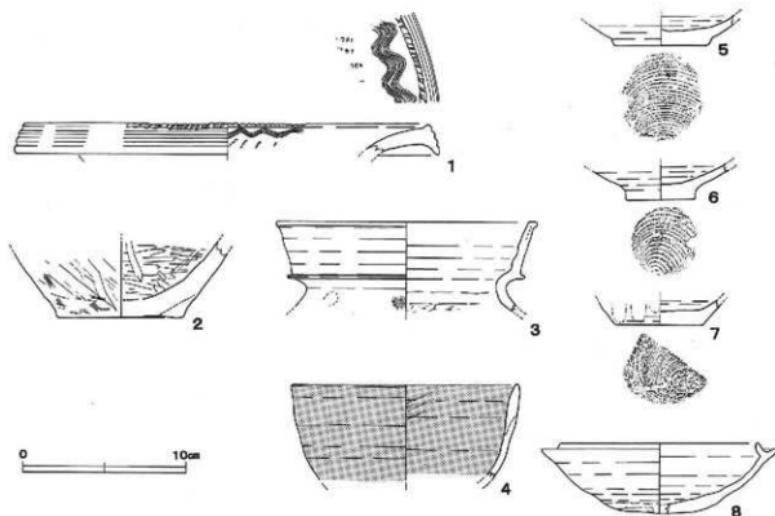


第204図 P0202出土弥生土器実測図 (1:3)

溝状遺構

SD09（第205図）

9Grの標高8.91mの調査面において、SK05など他の遺構に切られた状態でSD09を確認した。N-62°W方向に軸をとる上幅135cm程度、下幅60cm程度、深さ16cmを測る溝状遺構であり、側壁の立ち上がりは比較的緩やかである。



第205図 SD09出土土器実測図 (1:3)

覆土からはビニール袋半分弱の弥生土器、土師器、須恵器の破片が出土している。弥生土器の占める割合が高く、須恵器は少量である。これら出土土器片のうち図化に耐えるものを図示した。

205-1は広口壺である。口縁部内面は刻目文、波状文、列点文で飾られており、弥生時代中期後葉のものである。205-2は壺の底部片と思われる。胎土から弥生時代前期のものである可能性がある。

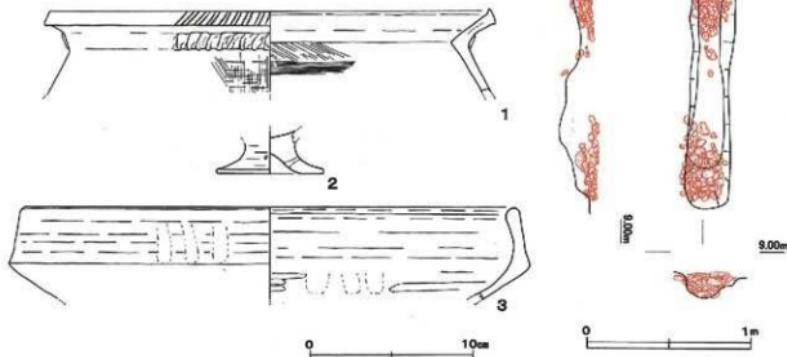
205-3は古墳時代初頭頃の壺である。口縁端部は外方に折り曲げられ、複合部の稜は水平方向に突出している。205-4は碗形の土師器である。内外面に赤色顔料が施されている。205-5～205-7は土師器の壊である。いずれも底面に回転糸切り痕が認められ、中世の所産と思われる。205-8は須恵器の壊であり、古墳時代終末期頃のものと考えられる。

これら出土遺物の下限は中世であるため、この溝状遺構もこの頃機能していたと考えられる。なお、遺構の性格としては自然流路が考えられる。

SD15（第206・207図）

7Grから8Grにかけての標高8.90mの調査面において、SD15を検出した。ピット状の搅乱を受けてはいるが、N-70°E方向に軸をとり、検出規模は長さ580cm、上幅40cm前後、深さ5cm～26cmを測る。底は起伏に富み、側壁の立ち上がりはやや急である。

遺構内には1cm～20cm大の礫が多数入り込んでおり、この隙の狭間から弥生土器、土師器、須恵器の破片などがビニール袋半分弱出土している。これらのうち実測可能なものを図示した。207-1は



第207図 SD15出土土器実測図 (1:3)

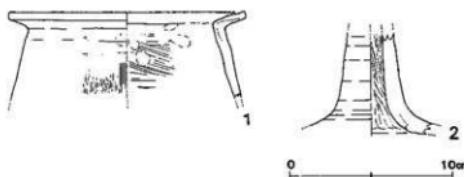
第206図 SD15実測図 (1:30)

弥生土器での壺である。口縁端部は肥厚し、端面には刻目文が巡らされている。また、頸部は「く」字状に屈曲し、外面には突帯文が貼り付けられている。中期中葉のものと考えられる。207-2は弥生土器の低脚壺と思われる。湾曲して大きく開く脚部には、2箇所に小さな孔を穿っており、後期のものと考えられる。207-3は時期は不明であるが焼成であり、比較的大きな破片で出土している。

出土遺物の中には、近世以降の瓦の破片も出土していることから、遺構の時期はこれに従うと推定できる。遺構の性格については不明であるが、礫や出土遺物はないものの、同一方向に伸びる溝状構造や、ピット状の搅乱が付近で認められるため、これらと何らかの関係を持つ可能性はある。

5区遺構外の出土遺物

5区遺構外からは土器片が出土しているが、これらはすべて合わせてもビニール袋半分程度とごく少量である。内訳は弥生土器、土師器、須恵器であるが、土師器の占める割合が高い。これらのうち、実測可能なもののみ以下に報告する。



第208図 5区遺構外出土土器実測図 (1:3)

土器 (第208図)

208-1には弥生土器を示した。壺の口縁部から胴部上半の破片である。口縁端部に拡張はみられず、頸部以下の内り、中期中葉のものである。208-2には須恵器を示した。器種は不明であるが上方部は筒状を呈しており、内面には

絞った痕跡が残る。また、下方部は器壁が広がっている。この上方部と下方部は別々に成形された後に接合されている。

田畠遺跡6区

6. 6区の調査結果

調査区の概要と遺構配置（第209・210図）

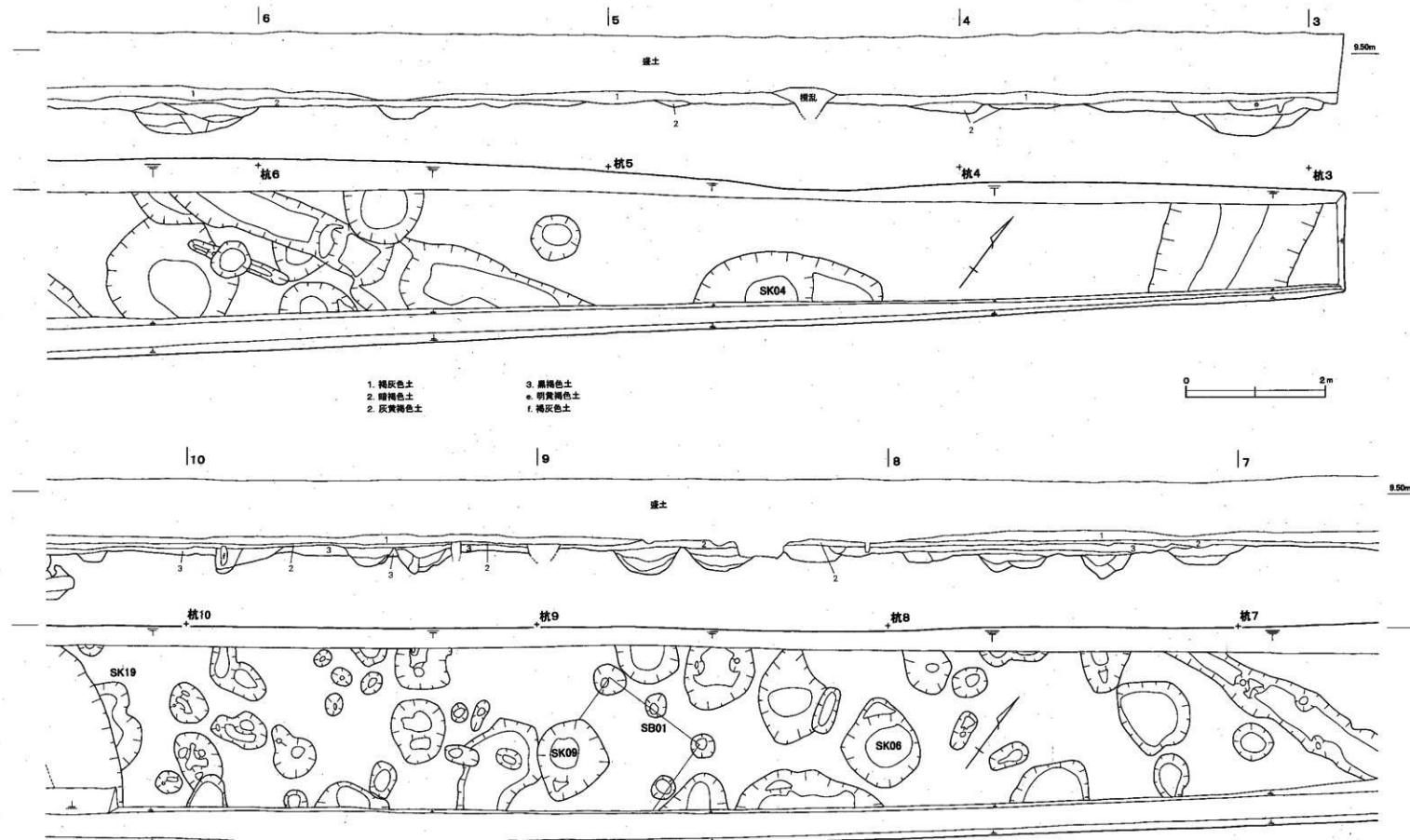
6区は今回の発掘調査の最も西の調査区であり、田畠遺跡の西端に位置している。北を市道浅柄古志線に、南を田によって挟まれているため、調査区壁が崩壊しても周囲に影響を与えないよう、調査対象地の境界から50cm程度内側において発掘調査を実施している。この調査区の平面プランは細長く、長さ76m、幅1.5m～3mを測り、面積は約210m²である。

調査にあたっては、まず、重機によって表土掘削を行った後に、調査区北壁沿いの表土面に基準杭を5m間隔で一列に設置した。その後、遺物包含層以下は手掘りによって徐々に掘削を進めたところ、標高8.20m～8.80m付近で地表面に達すると同時に遺構が確認できた。よって、この面を調査面として各遺構の調査を行い、成果を田畠遺跡6区遺構配置図にまとめた。また、調査区北壁を土層堆積状況の把握のために精査を行い調査区断面図を作成したため、この成果もあわせて示した。

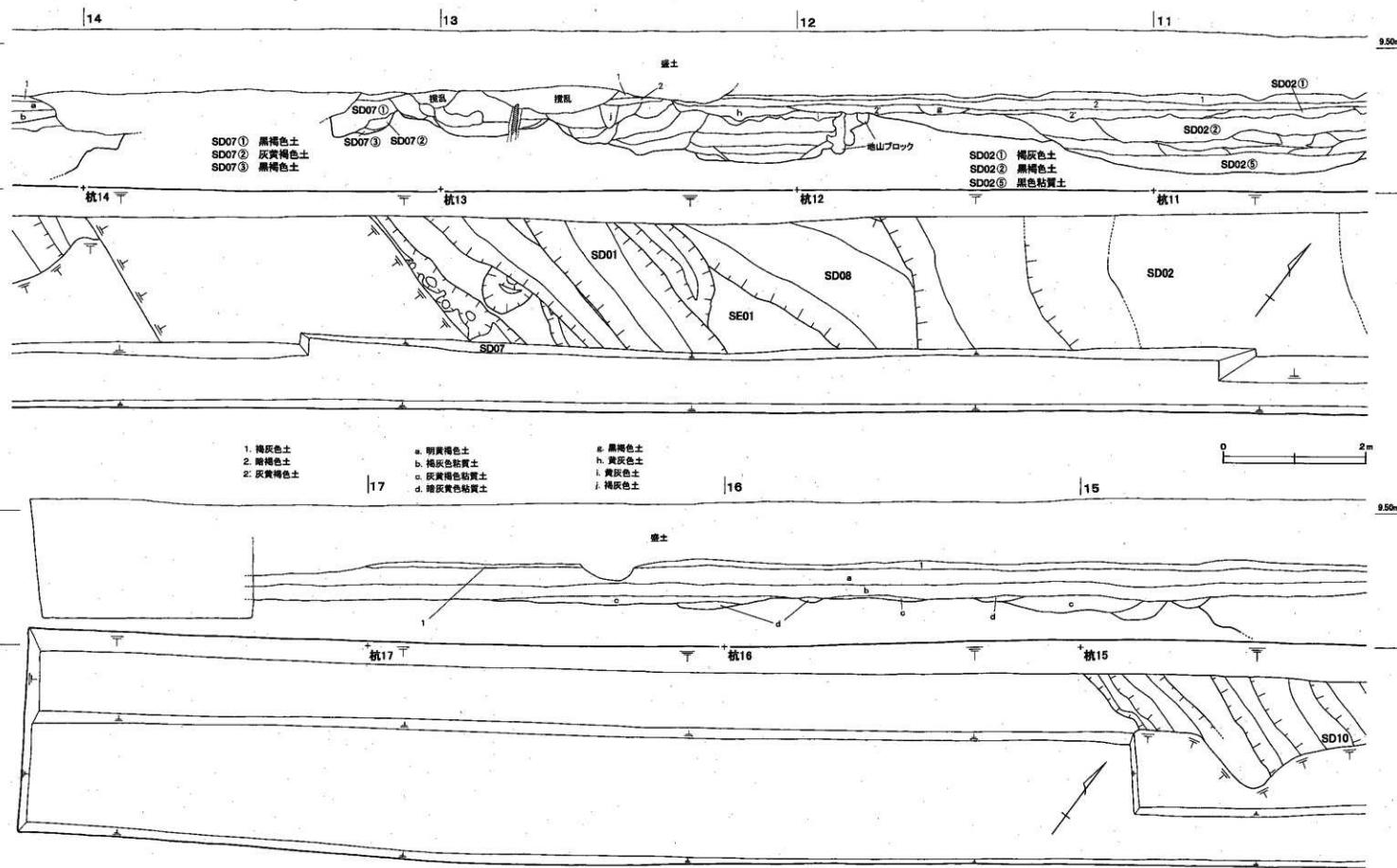
なお、6区の調査に用いた基準杭の座標は表6に示すとおりである。

杭名称	X座標	Y座標	杭名称	X座標	Y座標
杭 1	-73498.396	52039.713	杭11	-73528.185	51999.556
杭 2	-73501.375	52035.697	杭12	-73531.164	51995.540
杭 3	-73504.354	52031.682	杭13	-73534.143	51991.525
杭 4	-73507.333	52027.666	杭14	-73537.122	51987.509
杭 5	-73510.312	52023.650	杭15	-73540.101	51983.493
杭 6	-73513.291	52019.634	杭16	-73543.080	51979.477
杭 7	-73516.270	52015.619	杭17	-73546.059	51975.462
杭 8	-73519.249	52011.603	杭18	-73549.038	51971.446
杭 9	-73522.228	52007.587			
杭10	-73525.206	52003.572			

表6 田畠遺跡6区基準杭座標一覧



第209區 田畠遺跡6区遺構配體図1 (1:50)



第210図 田畠遺跡6区遺構配置図2 (1:50)

6区の遺構と遺物

6区の西端付近では地山の標高が急激に低くなる箇所が確認できており、その箇所以西では遺構がまったく検出できなかった。また、検出遺構の密度も他区と比較し疎になっているため、6区は田畠遺跡の西端を貫いた調査区であることがうかがえる。

以下、残存状態の良い遺物を伴う遺構を中心には、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝状遺構の順に報告する。

掘立柱建物跡

SB01（第211図）

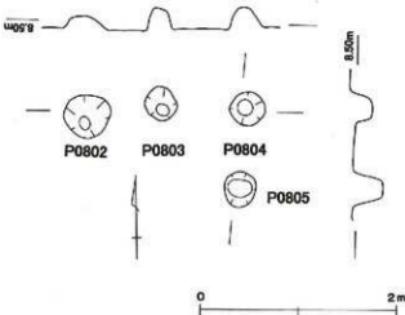
SB01は8Grの標高8.57mの地山面において検出したP0802、P0803、P0804、P0805によって形成される掘立柱建物跡と思われる遺構である。部分的な検出にとどまっているが、ほぼ真北に主軸をとり、梁間2間(1.6m)×桁行1間(0.8m)以上の規模を有するものと考えられる。柱穴は径34cm～45cmの円形プランを呈しており、深さは14cm～34cmである。

出土遺物については、P0802から土師器の小片が1点のみ出土しているが、他の柱穴からはまったく出土しなかった。したがって、遺構の時期は不明である。

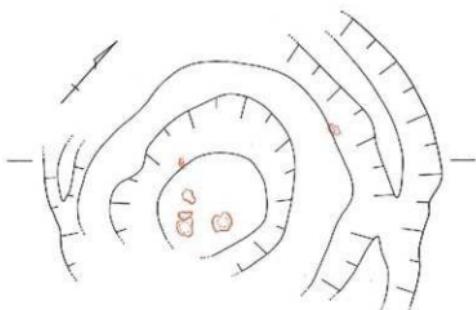
井戸跡

SE01（第212・213図）

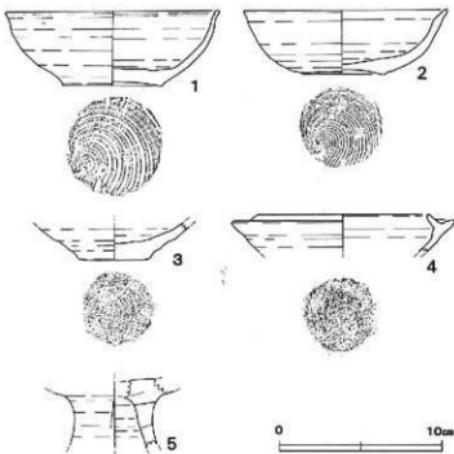
12Grの標高8.27mの調査面においてSE01を検出した。SD01とSD07によって一部に搅乱を受けているが、平面プランは円形を呈すると考えられる。検出規模は径240cm、深さ69cmを測り、最下底の標高は7.58mである。側壁は変則的に立ち上がっており、標高7.85m付近には段を有している。



第211図 SB01実測図 (1:50)



第212図 SE01実測図 (1:30)



第213図 SE01出土土器実測図 (1:3)

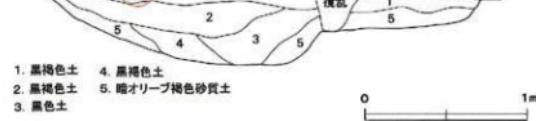
の所産と思われ、残存状態も良いことから遺構の時期を示すと考えられる。

213-4・213-5には須恵器を示した。前者は壊であり、後者は高壊である。古墳時代後期から終末期頃のものと考えられるが混入品であろう。

土坑

SK04 (第214・215図)

4Grの調査区南壁際標高8.70mの地山面においてSK04を検出した。およそ半分の検出にとどまっているが、N-51°E方向に長軸をとる楕円形の平面プランを呈すると考えられる。規模は長径275cm、短径145cmを測ると推定される。坑底は遺構南西寄りで最も落ち込み、この箇所の深さは47cmを測るが、北東寄りでは段を有している。



第214図 SK04実測図 (1:30)

遺構の性格については、最下底で水が湧くことから素掘の井戸と推定できる。

7層に分層可能な覆土からは、ビニール袋半分程度の土器片が出土している。内訳は、弥生土器、土師器、須恵器であるが、土師器の割合が高く、また、完形に近いものも数点出土している。なお、図示にあたっては、実測に耐えるものすべて掲載した。

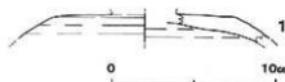
213-1～213-3には土師器の壊を示した。213-1・213-2は器壁が底部から内湾して立ち上がり、口縁部付近で若干外反し開口する。213-3は底部を絞り、器壁は体部に向かいやや内湾して立ち上がっている。これら土師器は12世紀頃

に二段の列点文が巡らされており、弥生時代中期後葉のものと考えられる。このほか、土師器、須恵器の小片が第1層から少量出土しているが、これらは混入したものと推定できることから、先の弥生土器片が遺構の時期を示すと考えられる。

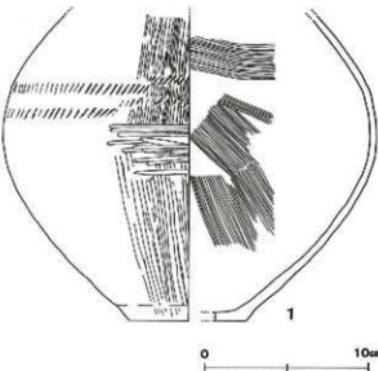
SK06（第216・217図）

7Grから8Grにかけての標高8.62mの地山面において、SK06を検出した。平面プランは不整な円形を呈しており、検出規模は径105cm程度、深さ58cmを測る。坑底は平坦であり、側壁はほぼ垂直に立ち上がるが、標高8.50m付近以上ではやや緩やかになる。

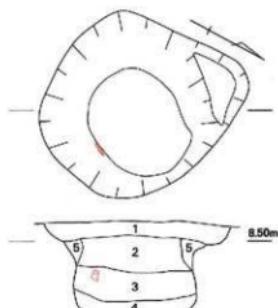
覆土は5層観察でき、ここから少量の土師器、須恵器の小片が出土している。このうち実測可能なものは217-1に図示した須恵器片1点のみである。振を欠くが蓋である。甲部は平坦であり、口縁部との境に稜をなす。また、内外面ともに回転ナデ調整が施されている。8世紀末から9世紀前半のものと推定されるが、遺構の時期を示すかどうかは不明である。



第217図 SK06出土須恵器
実測図（1:3）



第215図 SK04出土弥生土器実測図（1:3）



- 1. 黒褐色土
- 2. 黒褐色土
- 3. 黒褐色土
- 4. 黑褐色土
- 5. 灰黄褐色砂質土

SK09（第218・219図）

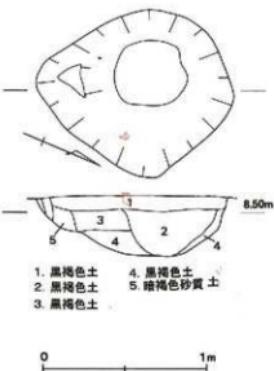
8Grの標高8.60mの調査面において、他の遺構を切った状態でSK09を検出した。不整な円形の平面プランを呈しており、検出規模は径95cm程度、深さ37cmを測る。坑底は丸味を帯び、側壁は内湾気味に立ち上がるが、遺構南側では勾配に変化が認められる。

5層に分層可能な覆土からは、土器の小片が少量出土している。内訳は土師器が大半を占め、須恵器は数点を数えるに過ぎない。これらのうち実測可能なものは219-1に示した土師器の壺片1点のみである。口縁部は単純に外反し、内面には粗いハケ調整が施されているため、ハケ目が凹線状を呈している。頸部は「く」字状に屈曲しており、頸部以下の内面には強いケズリ調整、外面には粗いハケ調整が施されているが、製作時期は不明である。

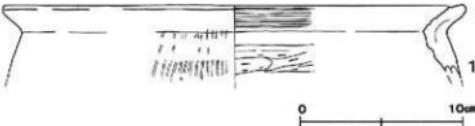
なお、遺構の時期については、出土した土器片の時期が明確でないため不明である。



第218図 SK09実測図（1:30）



第218図 SK09実測図 (1:30)

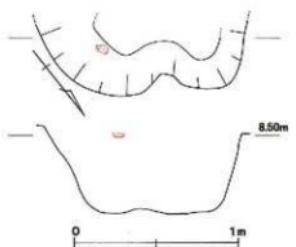


第219図 SK09出土土師器実測図 (1:3)

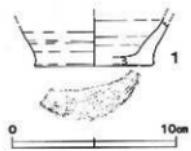
SK19 (第220・221図)

10Grの標高8.52mの調査面において、SD02によって切られた状態でSK19を検出した。半分程度の検出にとどまっているが、N-52°-W方向に長く、検出規模は長さ130cm程度、幅45cm以上、深さ50cmを測る。坑底は凹凸を有しており、側壁の立ち上がりは急である。

覆土からは土師器の小片が数点出土しており、このうち実測可能なものを221-1に図示した。底面に回転糸切り痕が残り、側壁は底部から急に立ち上がるが、体部では内湾するようである。中世の所産であり、遺構の時期を示す可能性がある。



第220図 SK19実測図 (1:30)

第221図 SK19出土
土師器実測図 (1:3)

溝状遺構

SD02 (第222・223図)

10Grから11Grにかけての標高8.54mの調査面において、SK19を切った状態でSD02を検出した。調査区を横切っており、長さ100cm程度のごく一部の検出にとどまっているが、N-56°-W方向に軸をとると思われる。規模は上幅6.6m程度、下幅1.2m、深さ84cmを測り、底の標高は7.70mである。また、側壁の立ち上がりは、西側では緩やかであるが、東側では急である。

この遺構の特徴としては、底より上位の標高8.00m付近で多数の木材が出土したことがあげられる。100cm以上の板材のほか、丸太を縦に半分に切断したものなどが見受けられることから、加工途中のものも含まれているようである。以上の状況から、この遺構は加工途中の木製品を保管していた施設である可能性もある。しかし、検出範囲が狭く、また、板材が付近から流れ込んだ可能性も指摘できるため、明言は避けたい。

覆土からはビニール袋半分弱の弥生土器、土師器、須恵器、陶器が出土しているため、実測可能なものはほとんど図示した。

223-1～223-4には弥生時代中期から古墳時代初頭頃のものを示した。223-1は弥生時代中期後葉の甕と思われ、口縁端面に2条の凹線文を巡らせている。223-2も同時期頃の広口甕であり、口縁内部と端面に凹線文を施す。223-3は弥生時代終末から古墳時代初頭の甕であり、複合部の稜は水平方向に突出しており、口縁端部は平坦面をなしている。223-4は弥生土器の底部片である。平底で内外面ともナデ調整が施されている。

223-5・223-6には土師器の皿を示した。両者とも底面に回転糸切り痕が残り、中世の所産と思われる。

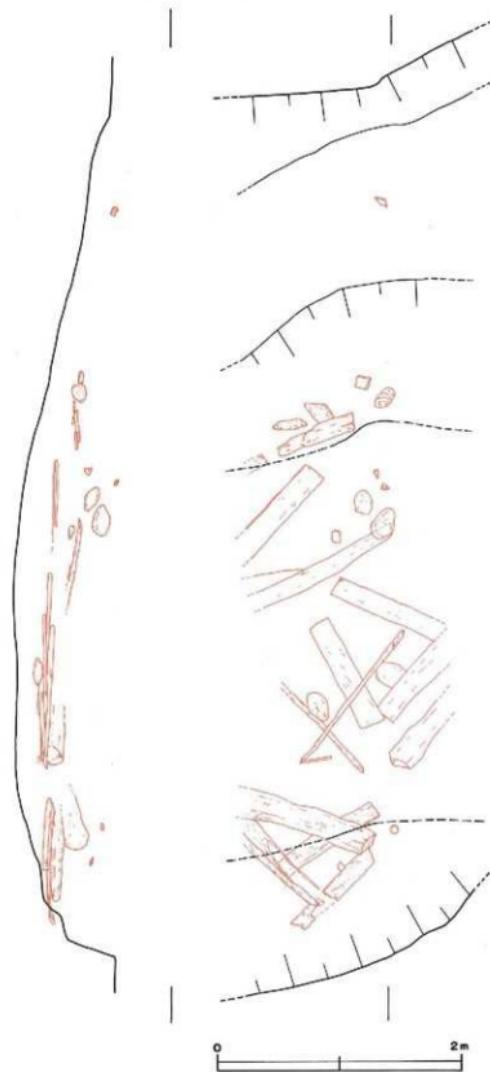
223-7・223-8には肥前系の陶器を示した。前者は皿であり削り出し高台を有している。後者は捕鉢であり、全面に鉄釉が施されている。

遺構の時期については223-7が最下層から出土していることから、近世と推測される。

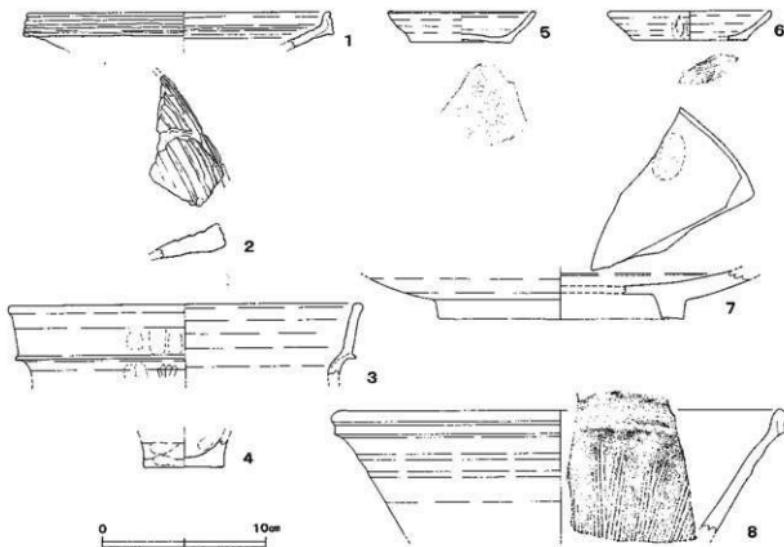
SD07（第224図）

12Grの13Grにかけての、標高1.80mの調査面においてSD07を検出した。現代水路跡によって大部分に搅乱を受けているため、規模などの詳細は不明ではあるが、N-83°-W方向に軸をとるようである。

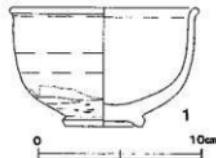
覆土からは、土師器、須恵器のごく小片が僅かに出土したほか、224-1に示した唐津系陶器の碗が出土している。底面に高台を削り



第222図 SD02実測図（1：40）



第223図 SD02出土土器等実測図（1:3）

第224図 SD07出土
陶器実測図（1:3）

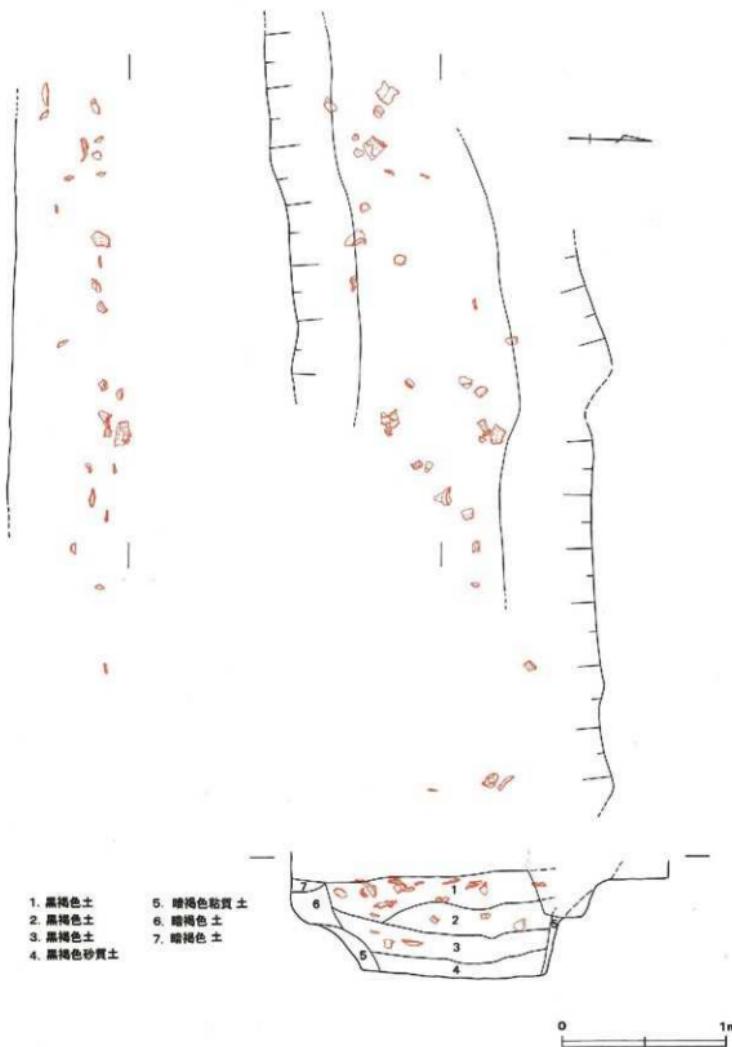
出し、器壁は体部でやや内湾するが、口縁部では外反し開口している。また、体部外面下半以外には釉薬が施されている。17世紀頃の所産と思われ、比較的大きな破片であることから、この陶器片は遭構の時期を示すと考えられる。

SD08（第225・226図）

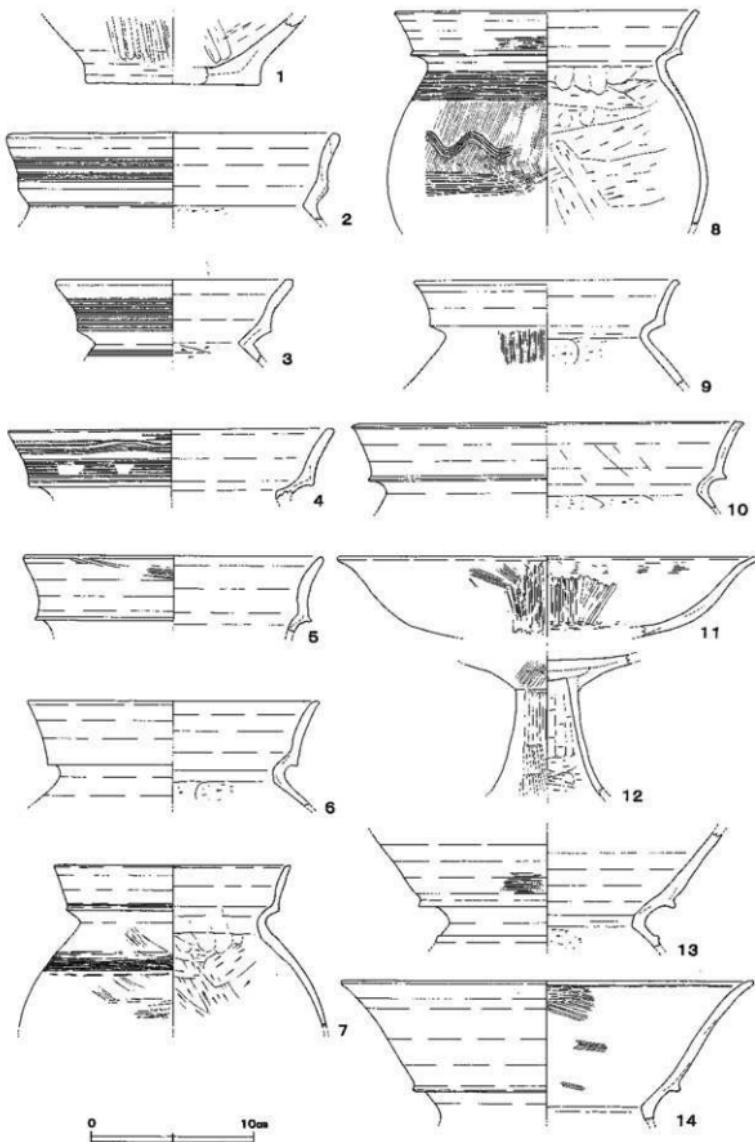
11Grから12Grにかけての標高8.38mの調査面において、SE01とSD02に切られた状態でSD08を検出した。調査区を斜めに横切っており、長さ300cm程度のごく一部の検出にとどまっている。N-85°-E方向に軸をとり、検出規模は上幅175cm、下幅90cm程度、深さ63cmを測り、底の標高は7.75mである。断面を観察すると、側壁は標高8.10m付近で傾斜を変える漏斗状を呈するものと考えられる。覆土は7層に分層可能であるが、第1層から第4層は横方向に堆積しており、掘り返しが行われた可能性を示唆している。

覆土からは、ビニール袋1袋弱の弥生土器などの破片が出土しており、比較的大きな破片だけを選別し図示している。

226-1は平底の底部片であり、器種については壺と考えられる。続いて壺を示した。口縁部に着目すると、226-2～226-4は外面に平行沈線が施されているが、226-5～226-10は無文である。また、226-8～226-10は口縁端部に平坦面を有している。226-11・226-12には窓坏を示した。前者は窓部であり、内外面ともミガキ調整が施されている。後者は脚部であり、外面にミガキ調整、内面にケズリ調整が



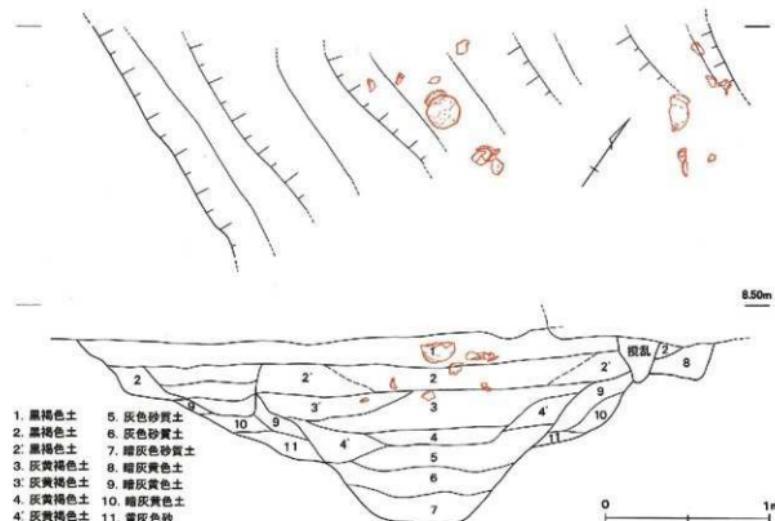
第225図 SD08実測図 (1:30)



第226図 SD08出土弥生土器等実測図 (1:3)

施されている。両者とも丁寧な作りであり、同一個体である可能性が高い。226-13・226-14は鼓形器台である。両者とも受部の内面にナデ調整が施されている。以上、図示した土器片の時期については226-1は弥生時代中期後半、その他は弥生時代後期後半から古墳時代初頭頃のものと考えられる。

図示したもの以外の小片の中にも、弥生時代中期後半と判断される土器片がまれに見受けられる。しかし、弥生時代後期後半から古墳時代初頭頃のものが大半をしめ、かつ、残存状態が良く最下層からも出土することから、これらが遺構の時期を示すと考えられる。



第227図 SD10実測図 (1:30)

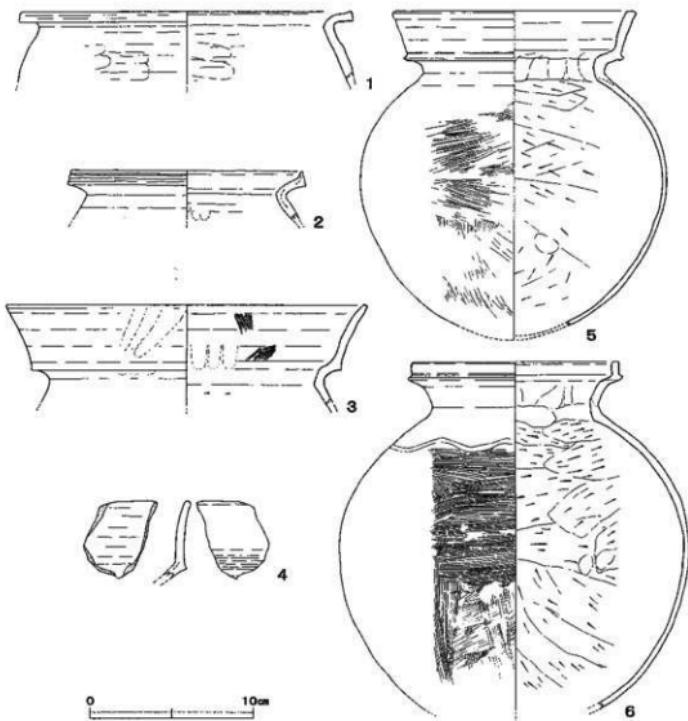
SD10 (第227・228図)

14Grの標高8.30mの調査面においてSD10を検出した。大部分に搅乱を受けているため、調査可能な箇所はごく一部であったが、N-72°-W方向に軸をとると考えられる。上幅3.3mの規模を有すると推定され、下幅は40cm、深さ115cmを測り、底の標高は7.15mである。調査区北壁でこの遺構の断面を観察すると、側壁の立ち上がりが標高7.60m前後で変化する、ゆるい漏斗状を呈している。

覆土は11層に分層可能であり、各層の切り合いを観察すると、第1層から第7層で大きなまとまりがみられる。つまり、当初は第8層から第11層の外縁から推測される、断面がゆるい「U」字状を呈していた溝を、後に断面「V」字状に掘り返した様子がうかがえる。

この断面「V」字状溝の覆土からは、ビニール袋1袋弱の土器が出土しており、実測に耐えるものは図示した。いずれも甕であるが228-1～228-3は弥生時代中期後葉、228-4～228-6は弥生時代終末から古墳時代初頭頃のものと考えられる。

これら出土遺物を勘案し、遺構の消長について推測すると、弥生時代中期後葉に築かれた断面「U」



第228図 SD10出土弥生土器等実測図(1:3)

字状溝は、弥生時代終末頃に断面「V」字状に掘り返され、古墳時代初頭頃までは廃棄されたと思われる。

遺構の性格については、この遺構以西の調査区で地山の標高が急激に落ち込み、遺構がまったく検出できない状況を勘案し、集落の外縁付近に巡らされた環濠である可能性が指摘できる。

6区遺構外の出土遺物

6区は田畠遺跡の西端に位置しているためか、遺構外出土遺物は少なく、その量はビニール袋2袋程度である。土師器の出土割合が高く、その他に弥生土器、須恵器、陶磁器、土製品、石製品がそれぞれ少量出土している。これらのうち残存状態の良いものだけを抽出し以下に報告するが、割愛したものもある。

土器・土製品（第229図）

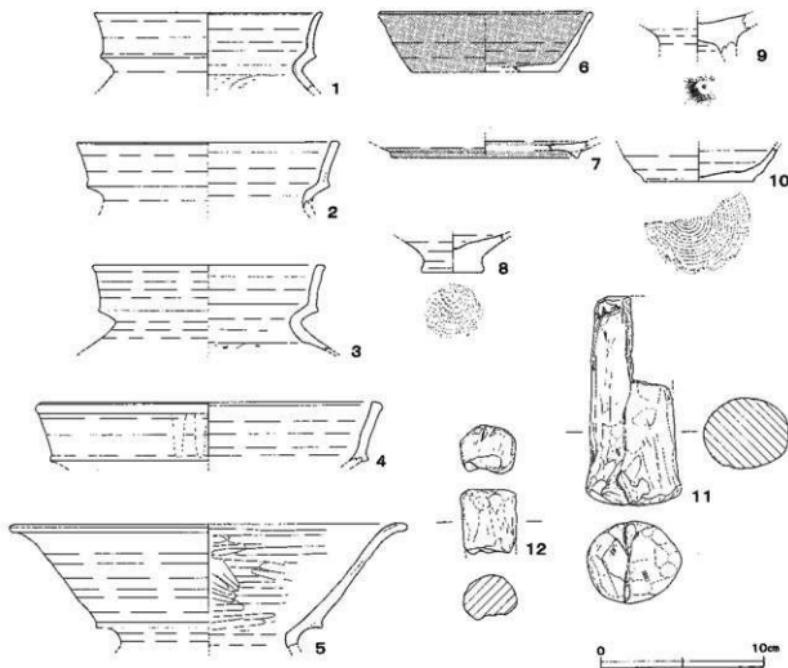
229-1～229-5には弥生時代終末から古墳時代初頭頃の土器を取り上げている。229-1の壺は口縁端部

を外方に若干引き出しているが、229-2～229-4の臺は口縁端部に平坦面を有している。229-5は鼓形器台である。受部の内面にはミガキ調整が施されている。

229-6～229-8には土師器を示した。229-6は壺であり、器壁は底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。また、内外面には赤色塗彩を施している。9世紀頃の所産であろう。229-7は皿と考えられる。底面外縁に高台を貼り付け、内外面に赤色塗彩を施している。これも9世紀の所産と思われる。229-9は底部の台部である。底面に回転糸切り痕が残り、11世紀か12世紀頃のものと思われる。

続いて須恵器を取り上げた。229-9は高环であり、脚部に切り込み状の透しが対に認められる。古墳時代終末頃のものであろう。229-10は壺である。底面に回転糸切り痕が残り、器壁は若干内湾気味に立ち上がっている。平安時代のものと考えられる。

土製品も少量出土しているため、229-11・229-12に示した。大きさは異なるが、两者とも円柱状を呈している。用途は不明である。



第229図 6区遺構外出土土器・土製品実測図 (1:3)

第5章 まとめ

今回の調査では多数の遺構と遺物を検出したものの、調査の原因となった開発事業が、歩道設置を目的とした道路拡幅工事であったため、調査区の幅を狭く設定せざるを得なかった。そのため、遺跡の中心付近を調査しているにも関わらず、遺構の性格などについては言及できなかつたことが多々あつた。よつて、調査結果全体を見渡し、下記の項目に沿つて所見を述べ、まとめとしたい。

田畠遺跡の範囲について

今回の調査に先立つて、調査範囲を確定するため試掘調査を行つた。その際、1区のさらに東の工事予定地では遺構・遺物ともに検出できなかつたため、田畠遺跡の範囲外と判断し、調査対象外とした。したがつて、調査着手時に1区の東寄りで田畠遺跡の東端が確認できることが予想できていたが、調査の結果、SD01・SD02付近から東に向かい、地山の標高が徐々に低くなつてゐる様子が観察できた。このことは、先の予想を裏付けると考えられる。また、6区においても、SD10以東では遺構がないと同時に地山の標高が徐々に下がつてゐることから、この箇所から以西は後背低地にあたる箇所と考えられ、田畠遺跡の西端も確認できたといえよう。

田畠遺跡の微高地について

今回の調査では、結果的に遺跡を東西に貫く形でトレンチを配置したため、田畠遺跡が占地してゐる微高地の起伏がつかめた。すなわち、4区において標高9.10m～9.30mでピークに至る地山面は、東と西に向かうにつれて徐々に標高が下がつてゐる様子が、各区の調査区断面図から観察できる。検出遺構の密度についても、4区から以東では小さくなつてゐる様子がうかがえる。

遺跡の出現期について

以前の諸報告によると、田畠遺跡の出現期は弥生時代中期中葉を廻ることはなかつたが、今回の調査では5区のSD01から出土した195-1など、前期と考えられる弥生土器が数点出土している。前期の遺構は検出できていないものの、これらの前期土器は田畠遺跡付近、おそらく南丘陵山麓付近に未発見の前期遺跡が存在することを示唆する可能性がある。

なお、弥生時代前期の土器は、島根県教育委員会による古志本郷遺跡発掘調査や、出雲市教育委員会による浅柄遺跡などでも発見されており、田畠遺跡付近の遺跡においても、近年、出土例が相次いでいる。

また、今回の調査において、古墳時代前半期頃の出土遺物見受けられなかつたことは、出雲平野の他遺跡の特徴と合致している。

弥生時代の溝状遺構について

2区、3区、6区では弥生時代中期後葉から古墳時代初頭頃の土器を出土する、上幅3mを上回る溝状遺構が検出できた。調査区狭隘のためいずれもごく一部の検出にとどまつてゐるが、今回の調査地の北に位置する下古志遺跡の発掘調査においても、同様の溝状遺構が複数確認されており、これらがつながり、環濠となる可能性も指摘できる。しかし、約200mの距離を隔てているため詳細は不明である。今後、範囲確認調査を行い、この溝状遺構の性格解明に努める必要があろう。

引用・参考文献一覧

第1章 位置と環境

- 出雲市教育委員会『遺跡が語る古代の出雲－出雲平野の遺跡を中心として－』1997
出雲市教育委員会『市道本郷新宮線道路改良工事に伴う古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書』1998
島根県教育委員会『斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書 古志本郷遺跡Ⅰ』1999
島根県教育委員会『三田谷Ⅰ遺跡 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V』1999
島根県教育委員会『蔵小路西遺跡一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2』1999
出雲市教育委員会『西谷墳墓群－平成10年度発掘調査報告書－』2000
出雲市教育委員会『光明寺3号墓・4号墳 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書II』2000

第2章 田畠遺跡の調査・研究小史

- 東森市良「破壊に瀕している低湿地遺跡」『季刊文化財』第20号 島根県文化財愛護協会 1973
島根県教育委員会『第3章 遺跡各節 田畠遺跡』『出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980
田中義昭・西尾克己「出雲平野における原始・古代集落の分布について」『山陰地域研究』第4号 島根大学山陰地域研究総合センター 1988
田中義昭「出雲市田畠遺跡出土の弥生土器」『山陰地域研究』第5号 島根大学山陰地域研究総合センター 1989
出雲市教育委員会『神門地区遺跡詳分布調査報告書』出雲市教育委員会 1989

第3章 調査の結果

- 山本 清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』1960
島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書－和田団地造成工事に伴う発掘調査－』1984
松本岩雄「7出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』株式会社木耳社 1992
赤澤秀則『講武地区県常闇場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会 1992
広江耕史「島根県における中世土器」『松江考古』第8集 松江考古学談話会 1992
大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994
斐川町教育委員会『後谷V遺跡』1996
広江耕史「出雲地域の中世土師器について」出雲平野の中世土師器検討会資料 1998

第5章 まとめ

- 島根県教育委員会『斐伊川放水路発掘物語』PART6 2000
出雲市教育委員会『浅柄遺跡、西出雲駅南土地区両整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2000

写真図版



1 1区調査風景（西から）

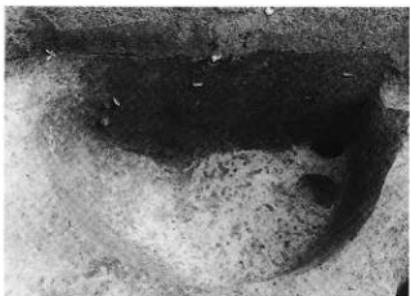


2 SI01調査状況（南東から）



3 SK05調査状況（北西から）

図版 2



1 SK05発掘状況（北西から）



4 SK19調査状況（南西から）



2 SK10調査状況（北から）



5 SK19調査状況（南東から）



3 SK14調査状況（東から）



6 SK19調査状況（北西から）

図版 3



1 SK25調査状況 (北西から)



4 SD01・SD02発掘状況 (南東から)



2 SK26検出状況 (北東から)



5 SD06調査状況 (北西から)

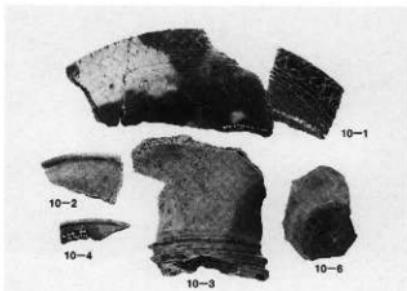


3 SK32調査状況 (北西から)

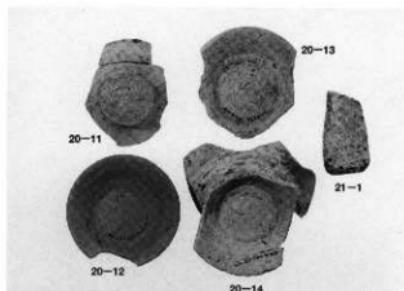


6 SD19調査区北壁断面 (南東から)

図版 4



1 SK05出土弥生土器



4 SK14出土土師器・石製品



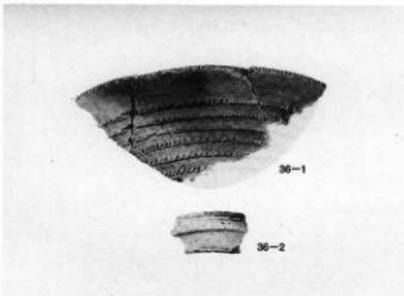
2 SK05出土弥生土器



5 SK19出土須恵器

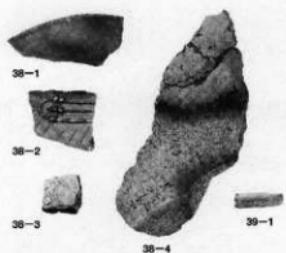


3 SK02・SK15・SK19出土土師器



6 SK25出土弥生土器

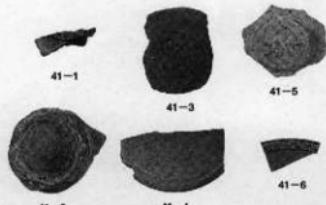
図版 5



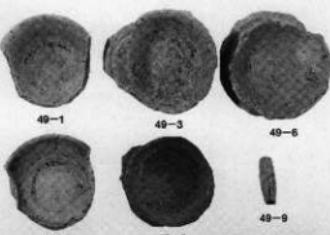
1 SK26出土弥生土器・石製品



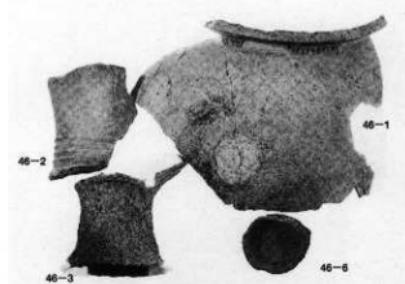
4 SK33出土石製品



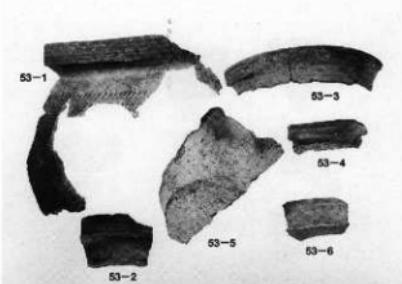
2 SK27出土土器



5 SK34出土土師器・土製品

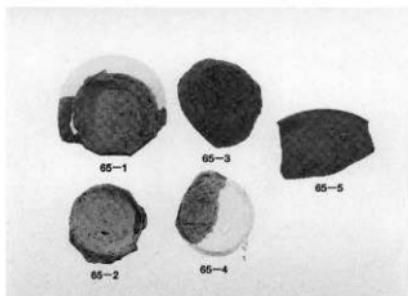


3 SK33出土弥生土器

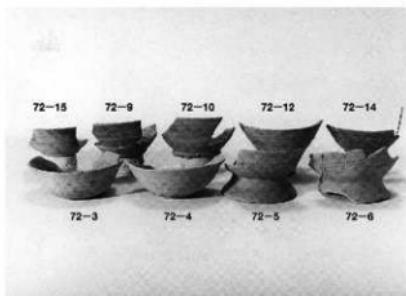


6 SD01出土弥生土器

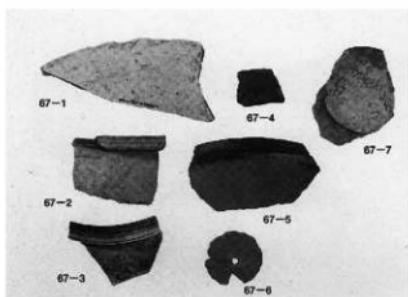
図版 6



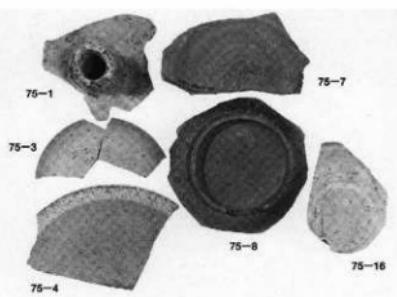
1 SD14出土土器



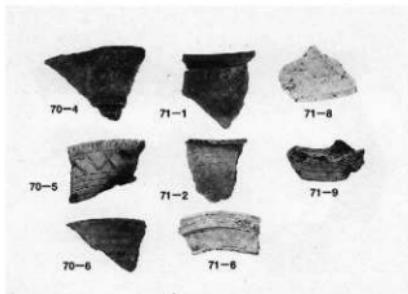
4 1 区遺構外出土土器



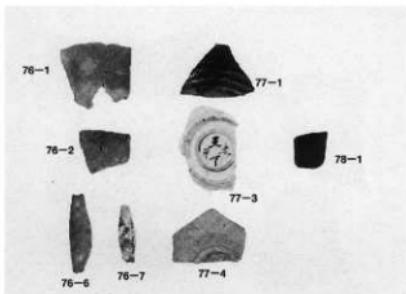
2 SD19出土土器・土製品



5 1 区遺構外出土須恵器



3 1 区遺構外出土弥生土器



6 1 区遺構外出土土製品・陶磁器・石製品

図版 7



1 SK18調査状況（北から）



4 SD02発掘状況（北東から）



2 SK27検出状況（北西から）



5 SD04調査状況（南西から）



3 SD01調査状況（南西から）

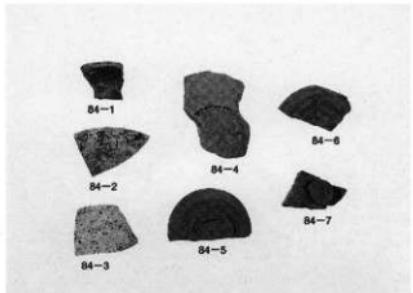


6 SD06土器（119-1）出土状況（北西から）

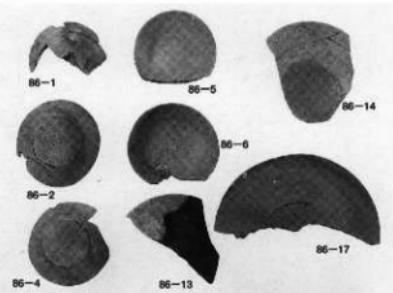
図版 8



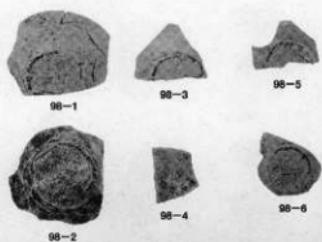
1 SD06・SD07調査状況（南西から）



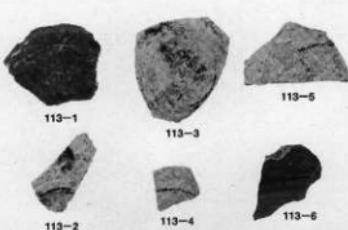
2 SK04出土土器



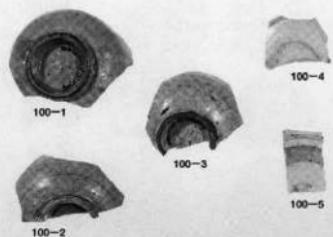
3 SK18出土土器



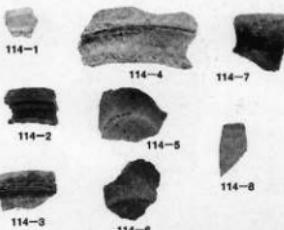
1 SK25出土土師器



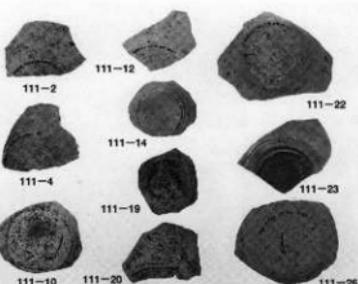
4 SD01出土土器等



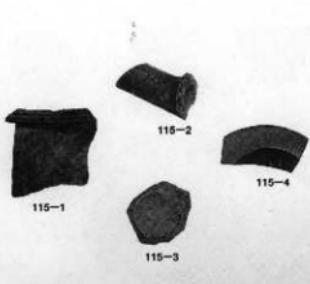
2 SK27出土陶磁器



5 SD02出土土器



3 主要ピット出土土師器等

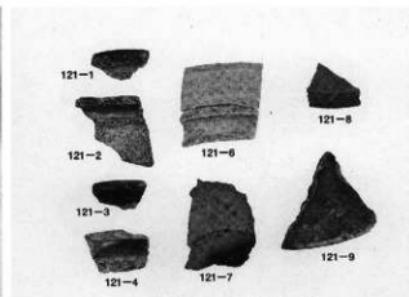


6 SD04出土土器等

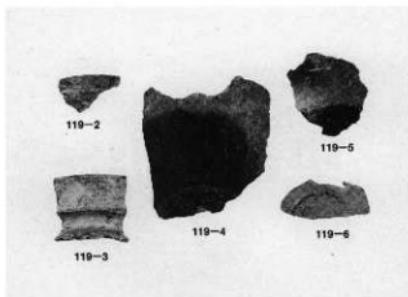
図版 10



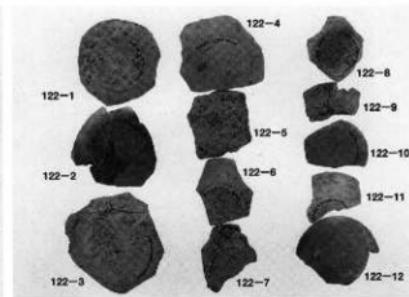
1 SD06出土土器



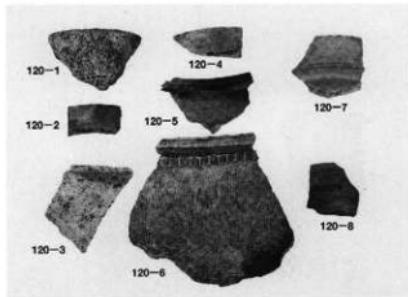
4 2区遺構外出土弥生土器等



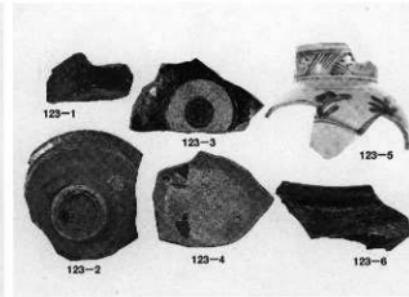
2 SD06出土弥生土器等



5 2区遺構外出土土器等



3 SD07出土弥生土器等



6 2区遺構外出土陶磁器等



1 3区調査風景（北東から）



2 SK01調査状況（南東から）



3 SD02調査状況（南東から）

図版 12



1 SD01調査状況（北東から）



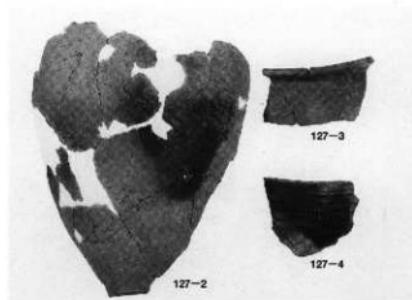
3 SD04・SD06・SD07調査状況（南西から）



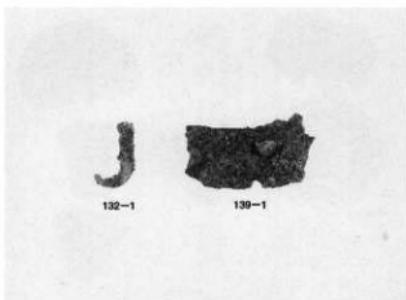
2 SD03完掘状況（北東から）



4 SK01出土弥生土器



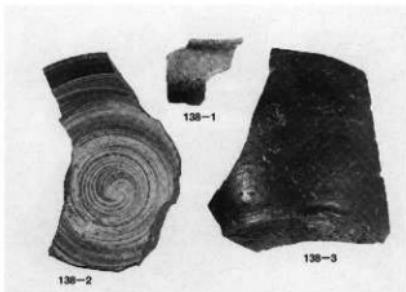
1 SK01出土弥生土器



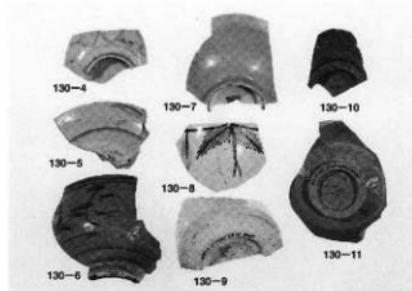
4 SK06・P0302出土鉄製品



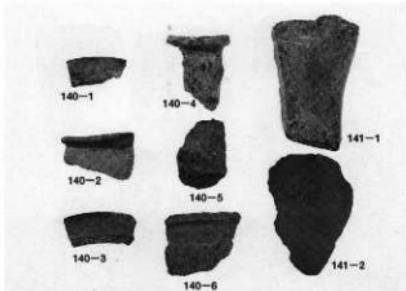
2 SK05出土陶器



5 主要ピット出土陶磁器等

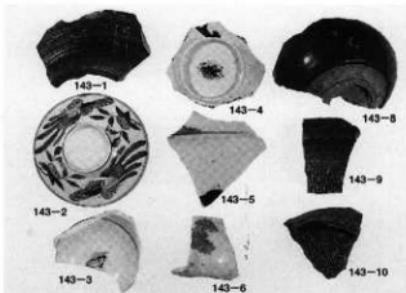


3 SK05出土陶磁器

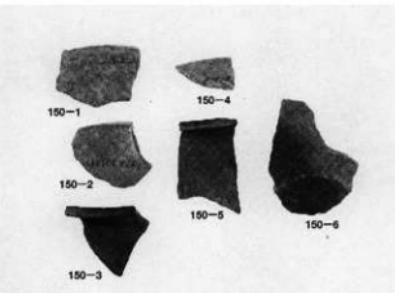


6 SD01出土弥生土器・石製品

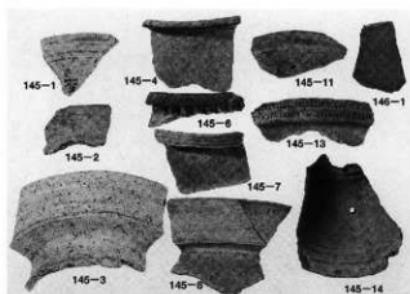
図版 14



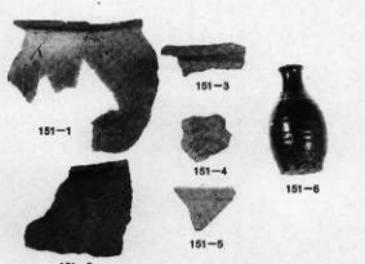
1 SD02出土陶器



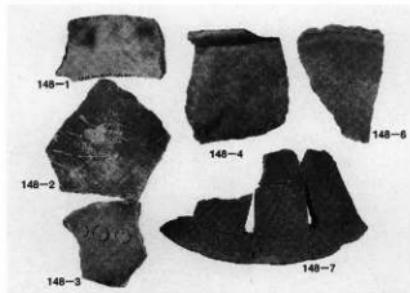
4 SD07出土弥生土器



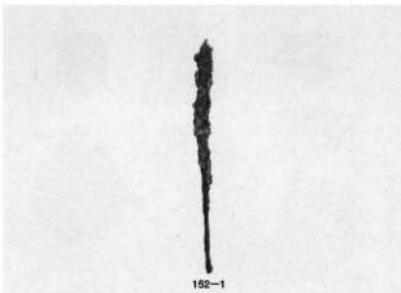
2 SD04出土弥生土器



5 3区遺構外出土弥生土器等



3 SD06出土弥生土器



6 3区遺構外出土鐵製品